
無関心の災厄　――　ワレモコウ

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心の災厄 —— ワレモコウ

【Nコード】

N 8 4 9 1 G

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

オレにはちよつと変わった同級生がいる。ソイツは、ちよつとぼーっとしている、一見無邪気な17歳男——きっとソイツはオレを非日常と災厄に導く張本人。

一一 .. 伝道師による開幕ベル（前書き）

本作品は、花小説企画（<http://juheweb.fc2.com/hanasyousetsu.html>）で書き下ろした「無関心の災厄——シラネアオイ」の続きに当たります。

ここからでも読めますが、もしよろしければ前作からご覧ください。

一一 .. 伝道師による開幕ベル

——この世で最も恐ろしいイキモノは人間^{ヒト}だ

昔、漫画だかアニメだかで、こんな台詞を見た事がある。

この命題は真実^{ホントウ}で、虚偽^{ウソ}だ。

ヒトほど卑屈で、卑怯で、卑下する卑劣なイキモノは他に存在しない。

ただし、その脆弱さゆえヒトは思考し、学習し、周囲を貶める事を自覚した。長い歴史の中でヒトはその力に目覚め、試行錯誤を繰り返してきた。

だからこそ、ヒトは恐ろしい。

その武器は頑丈な牙ではなく、鋭利な爪ではなく、ましてや骨でも筋肉でも軀全体^{カラダ}のどの部分でもなかった。

ヒトが武器として選んだのは、『言葉^{コトバ}』という形無きモノだった。牙よりも鋭利にヒトを傷つけ、鎖よりも頑丈にヒトを縛り、時に不可能と思われる治癒の力さえ持つ『言葉^{コトバ}』。

それは、ヒトが持つ唯一最強の武器。

武器をいかに巧みに操るかが、どれだけ強いかという証といっても過言ではない。

しかし最後に付け加えるならば、この命題には一つだけ条件がある。

それは、この命題を使用する本人もまたヒトである事——

長い枕詞になったが、要するに何が言いたいかって言うと、オレは今現在、目の前に出現した人物に恐怖している、というたった一文を導きたかっただけなのだ。

限界まで握りしめた拳は、とつくに感覚がなんぞ残っていない。首筋がすうっと冷えるのは、きつと汗が蒸発していく所為だ。^{セイ}

「キミは不思議やなあ」

先輩がいつだったか言っていた——コトバは魔法なのです、と。

オレはそれを疑っていた。未熟なオレにはまだ魔法が使えなかったために、魔法の存在自体を疑ったのだ。

でも、違う。

この世に魔法ってのは存在する。それは、時にヒトを縛り、戒め、傷つけ、癒し、嬲り、弄び、時に殺めてしまう。^{アヤ}ヒトが扱う最強の魔法だ。

現実に、彼の言葉がオレをこの場に縛り付けているように。

「見た目も、能力も、経験も……なんもかも全く一般人やいうんに、あり得んほどめっちゃめっちゃ強い極性を持つてはる」

オレのすぐ目の前に佇む細い眼鏡の男は、さも可笑し^{オカ}そうに目を細めた。

細く束ねた長い黒髪が風に靡き、風を巻き込んで翻る。

「キミは真実^{ホンマ}に不思議やわ」

もう一度同じ台詞を吐いた『災厄の伝道師』^{エヴァンゲリスト}は、オレをその場所に釘付けにしたまま、唇を笑いの形に歪ませた。^{ユガ}

01 .. ケモノとピエロとロボットの研修旅行

さて、オレが通うこの私立桜崎高校では、なぜか3年生の春に『研修旅行』というなんとも心躍らない名称の行事が待っている。

ちなみにオレたちは、2年の夏に海外『修学旅行』を終えている。世界遺産の宝庫チェコ首都プラハから音楽の都ウィーンを回り、最後はウィーンフィルハーモニー管弦楽団という世界でもっとも有名な楽団の演奏でしめるという、何とも芸術的な旅行だった。

うん、あれは今思い出しても素晴らしい体験だったといえよう。音痴かつ絵の才能など欠片もないオレにも分かるくらいだ。下手に南国の島に連れて行かれるよりは数百倍よかった——何しろオレは泳げない。

しかしながら『研修旅行』、それも、『京都』とかいうスタンダードかつ近場、また中学の時すでに訪問してしまった生徒たちも多い場所では、反抗期を終えはしゃぐ事を忘れた高校3年生がわくわくもできようはずもないし、新幹線で2時間半、言葉も通じれば看板の文字も読めるような場所に期待などない。

「遠出するのって楽しいねえ、マモルさん」

それなのに、オレの隣の席に座るコイツはなぜこんなにも楽しそうなのか。

いつものへらへらした笑顔で振り向いたのは、オレと同じ文芸部に所属するクラスメイト、香城夙夜^{こうじよびくや}。

コイツとの縁はもはや切ろうと思って切れるものではないだろう。一年生から三年生までずっと同じクラス、同じ部活、そして……幾つもの事件を共にした。

「その台詞、後ろで無表情かましてる白根に言ってやれ」

オレは後ろの席に座るクラスメイトの『無表情美人』白根葵^{しらねあおい}を示す。

相変わらず睨むようなアーモンドの瞳がオレと夙夜を貫いていた。

しっとりとした黒髪も美しいクラスメイトは、オレたちと同じ文芸部員の三年生。

「んー、だってアオイさん、反応してくんないんだもん」

「夙夜、その顔は高校3年生の男子がしても可愛くねえんだよ。頬ふくらますの、やめろ」

「マモルさんも冷たいよー」

へらへらした笑顔のまま言うんじゃねえよ。余計に腹が立つだろうが。

しかし、オレはそんなコイツを見ながら思う。

最初に会った時、夙夜はこんな風だっただろうか、と。

「オレ、京都の観光って初めてなんだあ」

少なくともこんな風にヒトと関わろうとしていなかった。もっと周囲に無関心で、当たり障りない受け答えだけを繰り返していたように思う。こんな風に誰かに返答を要求する事などまずなかった。

何より、コイツはそんなモノを望んでいなかった。

とてつもなく目がよくて、とてつもなく耳がいいアイツにとって、目の前で話すオレの声もこの新幹線の隣の車両に座る見知らぬ老夫婦の会話も同じように聞こえてしまうのだ。そんなヤツに特別なモノなんてありはしない。

完全で不完全な能力が故、無関心にならざるを得なかったのだ。無関心によって引き起こされた災厄は数えきれない。梨鈴が消えた時も、シリウスが消えた時も。

だからずっとコイツは『興味があるフリ』をしていた。

シリカ珪素生命体に。オレに。先輩に。白根に。

そうしないと、人間から逸脱してしまうから。

昔は不自然だった。ひどい甘党だったのもその一つ、今では少しマシになったが、昔はその好みも度を越して酷いモノだった――いや、それは今もあんまり変わらないか。

しかし、いつしかコイツの興味は自然なモノに変化していった気がする。

いつからだ？ コイツが自然と周囲のモノに関心を示すようになったのは。

「……なあ、夙夜」

「何？ マモルさん」

が、邪気ない笑顔にオレの気は一瞬にして削がれた。

やっぱいいや。コイツがいったい何に興味を持っていて、何に興味を持っているフリをしていようとオレには関係ねえ。そして果てしなくどうでもいい。

「それだけはしゃいでるオマエに聞いておこう。京都にいたら、いったいどこ行きたいんだ？」

全く関係のない質問に変えて、夙夜に問う。

「んー……そうだなあ、クラスの半分以上は清水寺から回るみたいだから、せっかくだし違う所に行こうよ」

だから、目の前のオレと話してるってのに、クラス全員の会話を聞いてなおかつ集計取るのはヤメロ。

「ね、アオイさんも一緒にどう？」

夙夜はひよい、と後ろの席を覗き込んだ。

窓側に一人、姿勢を正して座る美人は表情を変えず、視線だけで夙夜とオレを順に見た。

「私の至上命題は『ケモノ』の監視です。提案如何に関わらず、私は貴方と行動を共にする事になります」

ああそうですか。

という事は、当たり前のように夙夜と行動しているオレも白根と共に京都観光……ちくしょう、想像したくねえ。

なぜオレがこのマイペース男と作業機械女のお守をしなくちゃならねえんだ。

京都に來た意味が全くねえ。

と、言うのも、オレ柊護、『マイペース男』香城夙夜、『無表情美人』白根葵、以上3名が桜崎高校文芸部における全メンバーなのだから。

いつもの部活と変わりねえよ、バカ野郎。

オレは、不幸体質をもう一度自覚し、大きくため息をついた。

朝早くに出たのが幸い、オレたちは昼前に京都駅へ到着した。

自動改札に携帯端末をタッチすると、すんなりと通り抜ける事が出来た。目の前には有名な駅ビルの内部構造が迫っていた。全面ガラス張り、骨組みがそのまま見える無骨ながらも美しい建造。

見慣れぬ景色に、ようやくオレは遠くへ来たのだと実感した。

二泊三日の『研修旅行』、研修とは名ばかりで、教師たちの慰安旅行だというもっぱらの噂だ。

何しろ、大きな荷物はすべて事前にホテルへ郵送するという徹底っぷり。教師どころか、オレも夙夜もほとんど手ぶらだ。

そして桜崎高校の放任主義により、改札を出てから夕方ホテルにチェックインするまで自由行動。

明日も、チェックアウトからチェックインまで自由行動。

ラスト一日だけ、全員で京都御所を拝観するらしい。ちなみに、京都御所内を見学するには事前予約が必要なので個人で旅行する時は気をつけた方がいい、と嬉しそうに言ったのは担任だった。

しかし我が校ながら、改札口から同じ制服のヤツらがぞろぞろと出てくる様は見えていて気持ち悪いな。もぞもぞと動き回る、まるでミツバチの箱を開けてしまったような気分だ。

「マモルさん、どこ行こうか」

気がつけば隣に夙夜が、そしてその背後に守護霊のように白根が佇んでいた。

ああ、いつも通り。

「オマエ、あれだけ楽しみにしてたんなら自分で決めろよな」

「んー、オレ、どこでもいいよ」

この野郎、相変わらずめんどくせえな。

きよろきよろ、と見渡したところ、ふいに一枚のポスターが目

入った。

真っ赤な鳥居が何本も何本も、永久を作りだしている空間。千本鳥居と呼ばれるソレは、山奥に向かって伸びていく別世界へと繋ぐ道。

この鳥居の奥に、吸い込まれそうだ。
神隠し。

そんな言葉がオレの脳裏を過ぎる。

そう、きっと神がヒトを連れ去るという伝説はこんな景色を見た人間が創ったに違いない。

「伏見稲荷にしようぜ」

特に意味はなかった。

ただ、そこにポスターが張ってあったというだけの偶然。

それでも、世界はオレを呼んでいた。

まるで神隠し——異世界から神に呼ばれるように。

あの先に、何を見る？

もしオレに夙夜並の観察力があれば、普段無表情な白根の表情が『伏見稲荷』の言葉で微かに変化した事に気づいたかもしれない。

隣にいた夙夜は確実にその事に気付いたはずだが、全く言及しなかったのだからまたコイツが事件を呼び寄せたといってもいいだろう。

でも、オレはまだ気づいていなかった。

再び災厄が近づいている事に。

02 .. 古都の片隅の神社の片隅の邂逅

また災厄が導かれる。

無関心によって、ゆっくりと、ゆっくりと。

知らず知らずオレは、世界の終焉へと近づいていく。オレがアイツと関わる度に。アイツがオレと関わる度に。

無関心は道化師を惹きつけ、道化師は無関心を破壊していった。
変幻自在とご都合主義と自我の塊カタマリの集が、不幸体質のオレを逃すハズもない。

世界を望んだ部外者は、狭間でもがく哀れな道化師——何処にも関わらず、何処からも求められず、何処にも属すことはない。

——道化師は世界に捨てられたと勘違いした。

しかし世界は道化師を選んでいた。

ただし、狭間の存在としての道化師を望んでいた。
破壊されていく無関心。

少しずつ近づく世界の崩壊。

まだ知らない。

まだ知りたくない。

世界はオレを選ばなかったが、オレは世界を選んでしまった。
お願いだ。それでも、オレはまだ——

伏見稲荷大社。

赤い鳥居と狛狐が守る聖域、いわゆる『お稲荷さん』の総本山らしい。五穀豊穰を司る農業神の信仰は1300年以上にわたる。稲荷山と名付けられた小さな山一つを抱える大社を皮切りに、山頂近くまで続く朱色の回廊が彩っている。おおよしろ

巨大な朱色の鳥居を見上げると、まるで別世界へと迷い込んだような錯覚に囚われる。

周囲に多くの観光客が行来し、賑やかな土産物屋が並ぶというのに、ここだけ空気が違う。鳥居の内と外、ただそれだけなのに、ここは違う。

オレに続いて鳥居を潜る夙夜は、一礼していた。
なんか意外だ。コイツに信仰心があったとは。

その視線に気付いたのか、夙夜は相変わらずへらへらしながらオレに言った。

「鳥居の内は結界……『神域』だよ。カミサマの領土なんだ。鳥居をくぐるときは、カミサマにこんにちは、お邪魔しますって挨拶するんだよ」

「『神域』ね……オマエ、よく分からん知識は多いよな」
突如として見せる植物知識とか。

「んー、オレ、田舎育ちだから？」
なんじゃそりゃ、と思っていたら、続いて入ってきた白根も一礼して鳥居をくぐった。

アレ、これ、オレが無知的なカンジ？

朱色の本殿が目の前に迫り、砂を敷き詰めた固い地面の色に映える。

ちょうど今日も天気はいい。空の青色と朱色のコントラストにくらぐらした。本当に——どこかへ、吸い込まれそうだ。

本殿で簡単なお参りを終えて、オレたちは有名な千本鳥居の並ぶ回廊へと向かう。

「千本鳥居って言うけど、実際ここには5000以上の鳥居があるらしいよ」

「へえ、長い間に少しずつ増えたのかもな。ここ、いったいいつ出来たんだ？」

「今から1300年以上前の話です。全国的に季候不順で五穀の稔りの悪い年が続いた時期がありました。その折、祈請に神のご教示があったため山背国の稻荷山に大神を祀ったところ、『五穀大いに稔り国は富み栄えた』と言われています。それが現在より遡る事1312年、和銅4年の事です」

「……詳しいな、白根」

隣で聞いているオレがひくほどの知識を披露した白根は、パンフレットを呼んでいる風でも看板を見た風でもない。もともと知っていたのだろうか……やっぱり底しれねえ。

白根葵は、今年の春に突然桜崎高校に転校してきたナゾの無表情美人。

これまでの白根の言動から推察するに、コイツは何かしらのでかい組織に属しているらしい。そして、組織の命令で夙夜の監視を行っているらしい。組織については、全く謎に包まれている。白根も話そうとしないし、オレのような一般男子高校生が手に入れられる情報ごときで解明できるようなモノでない事もよく分かっている。分かっているのは、どうやらその組織が『珪素生命体^{シリカ}』関連だという事だけ。

自分で言っていて意味不明になってきた。

あまりに無謀、あまりに無関係、あまりに非現実的。

なあ、オレ、普通の男子高校生だよな？ ケタはずれ的能力を持った夙夜と違ってごくごく普通の男子高校生だよな？

ああ、泣けてきた。

と、そんな余計な事を考えていたのも回廊に出会うまで。

永久に続く朱色の鳥居を覗き込んだオレは、一瞬にしてその魔力に囚われた。

ぐらりと視界が揺らいだのは果たしてオレの体が傾いたのか、それともこの光景に脳神経が、視神経がやられたのか。

消失点まで永久に続く赤の回廊の先は視認できない。

灰色の石畳が、微かに陽光の欠片を反射しながら伸びていた。

「だいじょうぶ？ マモルさん」

「あ、ああ……」

一瞬ふらついたオレはすぐに石畳を踏みしめ、しっかりと立った。
なんだ、今の感覚は。

あ、背後から白根の視線の気配がする。どうせあのアーモンドの瞳で睨みつけているに違いない。振り向かなくても分かるから振り向かない。ほんのちよつとふらついた程度で睨まなくてくれ、頼むから。

「ちよつとだけ先に行こうよ。折角来たんだし……マモルさんが、だいじょうぶなら」

本音を言うなら、少しばかり怖かった。

先の見えない回廊も、不思議な感覚を残すこの『場』も。

だから本当はここでやめておけばよかったのだ。あんな、マイペース男の言う事なんか無視してこの場を離れていればよかったのだ。なぜ、オレは夙夜の言う事に逆らえないのだろうか？

一歩足を踏み出すごとに赤のラインが視界の隅を横切る。

とん、とん、とん。

石段を登る足音が静寂の神域に木霊する。

「不思議な場所だね。この山全体が、音を遮ってるみたいだ」

とん、とん、とん。

「またわけわかんねえコトを……」

とん、とん、とん。

「いつもより、あんまり遠くまで聞こえないってことだよ」

「……そうか」

ああ、またこのマイペースはよく分からない事を言い出した。

「何でだろうなあー」

しかし、なぜこんなに楽しそうなんだ。

スキップでもしそうな勢いじゃねーか。コイツ18歳の男だぞ、18歳。気色わりい！

「夙夜、オマエ、いまスキップしたらこの場に放置するからな」

「え、どうして分かったの？」

マジでする気だったのか。ここ結構な急坂に造られた石段なんだが、コイツにそれは関係ねえのか。

白根も同じ様に涼しい顔で淡々と石段を上っているが、オレはすでに息が上がりそうだ。自分の運動神経が悪いと思った事はないが、やはり運動しない文芸部にいる以上体力低下は否めない。これから体力勝負の受験シーズンに入るのだから、何かスポーツでも始めるか……？

そんなくだらない事を思った時だった。

「ねえ、マモルさん」

「あ？ 何だ？」

返答がぞんざいなのは疲れてるからだ、許せ夙夜。

「マモルさんは、『分かってる事があるのに言わないのをやめろ』って言うから言うけどさ」

「……嫌な前フリだな。とりあえず言ってみろ」

「ここ、いるよ」

ああ、最悪。

もちろんコイツがいう『いる』ってのは、オバケとか妖怪とかの類じゃない。

ここが京都って事を考えるところとしかするとイロのかもしれないが。

「いるのか……」

はあ、とため息。

どうしてオレは不幸体質。

「会いに行こうか？」

「いや、いいよ。これ以上疲れたくねえ」

そう言うと、夙夜はそうだね、と肩を竦め、笑った。

しかし、その笑顔の向こう、石畳の遥か彼方に。
和服の珪素生命体シリカが、ただ只管ひたすらに続く赤の回廊に佇んでいた。

オレは、ただ、息をとめた。

梨鈴、ではない。

顔が全く違う。チガ生意気そうな吊り目の幼い顔だった梨鈴と違い、このキツネ少女は大人びた細面の顔だ。しかし、ゆるく三つ編みにした銀色の髪といい、その髪の間からのぞくピンと立った耳、それにあの首に付けた赤いリボンと、金色の鈴。

それでも思い出してしまう。

あの時オレの目の前で最上の笑顔を残して消えた珪素生命体シリカのコト。

「梨鈴」

りいん、と鈴の音が鳴る。

ふっさりとした銀色の尾が鳥居の下で揺れる。

まるで太古から語られてきた物語のワンシーンのように、オレの目にくっきりと焼き付いた。

03 .. 無限回廊の珪素生命体（前書き）

※ 作者は関西出身ではないので、作中に出てくるのはエセ関西弁です。

さらに、口調に特徴を持たせているのです。何語かも不明です。
※

03 .. 無限回廊の珪素生命体

どくん、と心臓がひとつ脈打った。

消失点まで続く朱色の無限回廊。

その中に、陽光の欠片を反射して佇む銀の毛並みのキツネ少女。

まるで昔語りの世界に迷い込んだような不思議な感覚。

その姿はヒトに非ず。その軀はヒトに非ず。

その心は果たしてヒトであろうか。

炭素をベースに構成される有機生命体と違い、珪素生命体は珪素をベースに創られている。ヒトの手によってヒトを模して創られた新規生命体。姿かたちだけでなく生活も獣に近い珪素生命体は、普段『人里離れた山奥』で自然と共にひっそりと暮らしている。

が、時に彼らはヒトの元を訪れる。

かつてオレたちと共に在った珪素生命体のキツネ少女のように。

目の前に現れたのも、そんなイレギュラーなのだろう。

言葉を失ったオレの隣で、夙夜はいつものようにへらへらした笑みを浮かべていた。そして、その背後では白根が無表情に佇んでいた。

そう、いつものように。

目の前のキツネ少女は、ふいに踵を返した。

「あ……」

考える暇もなく足が追う。

珪素生命体を追ったオレは、いつしか何百何千の鳥居を駆け抜けていた。

まるで侵入者を惑わせるかのような朱色の無限回廊を通り抜け、オレはただ石段を駆け上っていった。

いくつかの分かれ道もあったようだが、そんなことどうでもよか

った。

もし鳥居の内と外で世界が違うってのなら、オレは今、いったい鳥居の内側の神域にいるのか？ それとも外側の現実世界にいるのか？

ただ銀色の毛並みを追い、幾つもの鳥居を駆け抜けていった。

ふと気づけば、駆け抜ける朱色と銀色の尻尾の遥か向こうに人影が立っていた。

遠目には分かりにくいのが、鳥居と比較して推定する限りかなりの長身で、長い黒髪を細く後ろに流していた。少し色が入った小さなレンズの眼鏡、口元はかすかに微笑^{ワラ}っているようにも見える。

駆けていた珪^{シリカ}素生命体は、人影に駆け寄った。

銀色のケモノと、白衣の男性が寄り添う。

オレは、そこから数メートルの距離を置いて、息を整えながら立ち止まった。

「なんや、観光客かいな。修学旅行か？」

男性がへらりとオレに笑いかけた。

「ここからは神社の順路やないで」

東京育ちのオレには耳に馴染まない関西弁のイントネーション。

地元の人間なのだろうか、白衣を纏った長身の男は、珪^{シリカ}素生命体の頭を撫でながらオレに笑いかけた。

「あ、ありがとうございます」

オレの視線が珪^{シリカ}素生命体に注がれているのを悟ったのか、男は肩を竦める。

「コイツが気になるんか？」

「あ……はい」

「珪^{シリカ}素生命体や。その言葉くらいは知っとるやろ。学校で習うちゃう？」

知ってるも何も、オレはここ2年で既に3人の珪^{シリカ}素生命体と邂逅を果たしているのだ。最も、3人とも消滅してしまったが。

「こいつはたまに人里におりてくんねん。かわいいやろ？」

たまに人里に……その割に、この男性にはひどく懐いているようだが。

まあ、余計な詮索はすまい。

何より、珪素生命体シリカ関係のイベントはジョーカーだと知っているにも関わらず、オレはそのカードを自らひいてしまった。

捨てるか？

いや、捨てるには心が納得しない。あの銀の毛並みは、オレの心を乱し過ぎた。

ぎゅっと拳を握り締める。

覚悟。

何度も唱えたその言葉を、今一度繰り返す。

「……おいで」

オレは手を差し出した。

いつかのキツネ少女との邂逅のように。

珪素生命体シリカはぴくん、と耳を立てた。

あ、オレに興味を持った。

「お兄さん、誰？」

「オレか？ オレは柊護ひいらぎあむる。マモル、だ」

「マモル」

珪素生命体シリカの声は澄んでいる。それはきつと、響かせる媒体が金属であり宝石であるからなのだろう。

オレは自分の頬が緩むのを感じた。

「オマエ、名前は？」

「名前……？」

キツネ少女は困ったように寄り添った男性を見上げた。

「すまんなあ、あんちゃん。残念やけどこの子、名前ないねん」

へらへらと笑う男性は——ああ、どっかで見たような表情だ——肩を竦めて見せた。

長い黒髪が風に翻る。

木々の隙間から零れおちる陽光が、彼の顔に落ちている。もちろん

んオレにも、あの銀の毛並みの珪素生命体シリカにも。

「そうですか」

オレはそのあたりで切り上げるつもりだった。深入りすると全くいい事がないという事は経験から分かっているのだ。

「友達待たせてるんで、オレ、これで……」

ところが、目の前の男はそれまでのへらへらとした表情を一瞬でしまい込んだ。

「ちょい待ちいや、あんちゃん」

あ、警鐘。

アラームがオレの脳内に鳴り響く。

危険。

「この子がこんなに興味を示したんは見たことないんやわ」

「……目の前でアナタにぴったりくっついていっているような気がするのはオレの幻覚ですか」

「ボクは例外や」

ああ、そうですか。

「せやけどキミは……違チヤうやろ？」

男の放つ言葉コトバが、少しずつオレを拘束する。

「初対面、名前、それからキミの態度」

「……」

男は指折り数えていく。

まるでオレをその一言一言で縛りつけていくかのように。

「どう考えても、一般人やない」

たったそれだけで。あの珪素生命体シリカがオレに返答したというだけで、オレは危険人物扱いか？

オレがこれまでに会ったケモノは、例外なくこんな風だったぞ？

「少なくとも一度は珪素生命体シリカに遭アつとるはずや」

背筋に冷たいモノが一気に流し込まれた。

ウソだろ？ なぜわかるんだ？

ほんのついさっき出会っただけのこの男に、どうしてソレが分か

るんだ？

「――キミ、何者や」
ナニモン

一瞬で気温がゼロまで降下した。

得体の知れない相手が、オレに対して『何者か』を問う。

それだけで、これほどの恐怖が襲う。

自分が何者かを問われただけ。

ただそれだけの言葉がオレをその場所に束縛した。

オレは何者だ？ オレは誰だ？ オレはどうしてここにいる？

喉が張り付いて言葉が出ない。

言葉の出ない『口先道化師』など、一片の価値もない。

「えらい強い適合者コンフイやなあ。不自然や、ああ、何が不自然で、そんな適合者コンフイがここにいること自体がありえへん」

答えられない。

オレは、何者だ。

「キミは不思議やなあ」

不思議？ オレは、不思議？

ダメだ、カラダ 軀アタマも思考も動かない。

先輩がいつだったか言っていた――コトバは魔法なのです、と。

オレはそれを疑っていた。未熟なオレにはまだ魔法が使えなかったために、魔法の存在自体を疑ったのだ。

でも、違う。

この世に魔法ってのは存在する。それは、時にヒトを縛り、戒め、傷つけ、癒し、嬲り、弄び、時に殺めてしまう。アヤ ヒトが扱う最強の魔法だ。

現実には、彼の言葉がオレをこの場に縛り付けているように。

答えられず硬直したオレを見て、その男は肩を揺らして笑う。

「キミは不思議やなあ。見た目は全く、まるまる一般人やいうんに、あり得んほどめっちゃめっちゃ強い極性を持つてはる」

オレのすぐ目の前に佇む細い眼鏡の男は、さも可笑しオカそうに目を細める。

細く束ねた長い黒髪が風に靡き、風を巻き込んで翻った。

「キミは真実ホンマに不思議やわ」

もう一度同じ台詞を吐いた男は、オレをその場所に釘付けにしたまま、口元を笑いの形に歪ユガませた。

動けない。動けない。

何者や——本質を突いたそのたった一言が、オレの全身を縛りつけている。

——オレは、いったい、何、だ？

が、そこへ聞き慣れた声が響いた。

「マモルさん」

ノーテンキな声。

オレにかけられた言葉の呪縛を解く、マイペース男の声。

「なんや、キミの友達か？」

ようやくオレの中に呼吸が戻ってきた。

長い階段を駆け上がり、全身が酸素を欲していたというのに息を止めてしまったオレの全身は完全に痺れていた。

自然と荒くなる呼吸。

そのオレの隣に、余裕の表情を見せる夙夜が並んだ。

「マモルさん、意外と足速いんだねえ。追いつくの、大変だったよ」
へらへらと笑う夙夜の後ろには、やはり白根が息も切らさず佇んでいる。臙脂色のバレッタで留めた黒髪をさらりと風に流し、無表情で。

すると男性は、驚いた顔をして白根を見た。キツネ少女もぴくんと尻尾で反応した。

何だ、その反応は。

「なんや葵、そんなトコで何してるんや」

「……は？」

ああ、ようやく声が出た。

えらく間拔けだが、声が出たことに変わりはないだろう。

04 .. 無関心と道化師の不確定な自己

あ、無理、オレのキャパシティ限界いっぱい、もうオシマイ。理解不可能、思考停止。

何で、研修先で会ったこの男が、同級生、白根葵の名を呼ぶ？

「……私の命題をお忘れですか」

白根は答える。

淡々と、静々と、粛々と。

「キミの命題は『ケモノの監視』……ああ、そう言うコトか」

男の眼が細められる。

命題。ケモノ。監視。プラス、白根葵。

男の口から語られた一文節、そこから導かれる結論は一つだけだ。

「キミがケモノやったんか。それならその強い極性も納得や」

「いいえ、違います」

白根は抑揚ない声で答えた。

「ケモノは、彼です」

白根は、へらへらと笑う夙夜を指差した。

「え？ キミやなくて？」

残念ながら、オレじゃねえよ。

またコレか。

デジャ・ヴ
既視感。

「私も最初はそう結論付けました。しかし、それは誤りでした」

「なんや、葵が素直に間違いを認めるとは珍しいなあ」

白根はそう言われて一瞬だけ口を噤んだ。

「それほどまでに香城夙夜（かうじよじゆくや）のケモノとしての資質は飛びぬけています」

「じゃあ、こっちのあんちゃんは何者や？」
ナニモン

「柊護（ひいらぎ）さんの正体に関しては不明です。私の命題でもありませんので、調査する予定はありません」

「ふうん」

目の前の男は首を傾げ、オレを上から下までじろじろと見渡した。それだけで、全身を悪寒が駆け抜ける。

やべえ、完全にこの男に対して萎縮してしまった。一度持つてしまった苦手意識はそう簡単に消す事が出来ない。

「ボクはこっちのあんちゃんの方が重要に見えんねんけどなあ」
すまん、それだけはない。

この一般男子高校生のオレが、夙夜より重要視される事などあり得ない。

「……まあええやろ、そっちはボクの方から上にゆつとくわ」

「私は貴方の動向に一切関知しません」

「ええよ、葵には迷惑かけへんから」

その男は、寄り添った珪素生命体シリカのキツネ少女を撫でながら笑った。

「ほんなら、ボクはもう行くさかい。旅行の邪魔したな」

ひらひら、と手を振る男。

このまま帰る気か？

オレに、言葉の魔法をかけたまま。

——何者や？
ナニモン

あの瞬間にオレを縛りつけた魔法は解けていない。

「待て」

思わず口から飛び出した言葉は、男の足を停めた。

「なんや？ あんちゃん」

振り向いた男に、一瞬ひるむ。

が、恐怖をぐくりと飲み込んで問い返した。

「オマエ、何者だ？」

「ボク？ セヤな、キミには教えてもええか。ボクはなあ……」

唇の端が上がる。笑みの形に。

「望月桂樹もちづき けいすけ。そこにおける葵の、同僚で、研究員や」

その上、オレが全く答えられなかった質問に、何の戸惑いもなく

即答しやがった。

男と珪^{シリカ}素生命体が去った鳥居の真ん中で、オレは自分の心臓の音を聞いていた。

風の音と葉擦れの音と、陽光の欠片だけが残るこの場所で。

「なあ、夙夜」

「なあに、マモルさん」

「例えば聞くけど、オマエはさ……何者なんだ？」

「……ヘンなこと聞くんだね、マモルさん」

夙夜は笑った。

「俺が何者かなんて、そんなのオレには分かんないよ……だからお願い、聞かないでマモルさん」

とても悲しそうに、以前、一度だけ見せた表情で。

オレは夙夜に釘付けになった。

「先輩は『無関心の災厄』って言った」

一目見るなり、何の躊躇もなく。

「アオイさんは『野性のケモノ』って言った」

探して桜崎へとやってきた。

「ねえマモルさん。マモルさんには俺は何に見えるのかな……？」

オマエが何に見えるかだって？

何にとって……。

ケモノ？ 災厄？

どれもオレにはピンとこない。

何が適切なのか、ワカラナイ。

口を噤んだオレを見て、夙夜はもう一度だけ悲しそうに微笑んだ。

「ごめんね、マモルさん。困らせるつもりはなかったんだ」

オレはどんな言葉もかけられない。

ああ、こんなじゃ『口先道化師』失格だ。

一人前への道は、まだまだ遠いようだ。

「でも……」

次に顔を上げた時、夙夜はいつもの笑顔に戻っていた。

「うん、俺はどっちでもいいや」

夙夜の笑顔が創りモノだとは言わないが、少し寂しくなることがある。

悲しそうに笑う時、間の抜けた笑顔を見せる時。

どっちが真実の夙夜なんだろう？

「夙夜……」

「ん？ なあに？」

「……いや、何でもない」

少しだけ過った違和感^{ヨギ}は、きっと気のせいだ。

しかし、オレの中で何かが膨れ上がっていく。

それは不安かもしれないし、もしかすると疑心かもしれない。

可笑しい^{オカ}。おかしい。オカシイ。何かがオレの認識とズレている。

いつの間にかオレは違和感を拭えなくなっていた。

いったいそれは、いつからだった？

もともと人当たりはいいが、無関心とはいえないほどにヒトとの

交流を持つようになった夙夜の変化がオレを落ち着かせない。

——無関心が壊れている？

その結論に、オレはぞっとした。

先ほどまでとは打って変わって、楽しそうにスキップで——だからヤメロって言っただろうが——石段を飛び降りていく夙夜の後姿を追いつながら、オレは考える。

そんな事は絶対にはないと思うのだが、もし、コイツが本気で、一つの目的を持ってその能力を使い始めたらいったいどうなるんだろう、なんて考えて不安に思う事がある。それは、無関心の破壊。

能力に無頓着であるがゆえ、ギリギリラインで保つ事の出来た人間性はけし飛び、おそらく夙夜は『野性のケモノ』の本性を現す。

それは果たして、いったい、ヒトなんだろうか。

果たしてコイツはヒトであり続ける事が可能なんだろうか……？

恐ろしい想像に、オレはぞっとした。

そんなことあるはずない。

そんなことありえない。

オレが無関心を破壊し始めているなどと。

短期間に出現した珪素^{シリカ}生命体は桜崎だけで既に3体を越した。

そして、オレたちの前に現れた白根と、望月と名乗る男。

無関心だけじゃない、オレを取り巻く環境がどんどん変化していく。蚊帳の外、『口先道化師』を置き去りに、部外者を寄せ付けないままに。

目の前にまっすぐ続く石段の数を一步一步数えながら、オレは一步一步向こうに近づいて行っていた。

片鱗を見せた白根の組織。

崩れ始めた無関心。

もしやオレは気づかぬうち、その中心にいるんじゃないだろうか？いや違う。そう思っても、いつだってオレは部外者だった。期待するな。オレはただの凡人。ただの平凡な男子高校生。

オレが世界を選んだところで、何も変わりはない。

何しろオレは世界に望まれなかったのだから。

宿に戻ったオレは、布団の上に寝転がって頭の中を整理する。

あの望月という男の笑みが、声が、オレの中にとどまって離れない。あの瞬間の恐怖が、未だオレの心を縛りつけているかのようだ。

しかも望月は、白根と同じ組織に属する研究員だと名乗った。

白根の組織。いったい、それは何だ？ 目的は？ 母体は？

今でこそ白根はただのクラスメイトとして生活しているが、あれらがオレや夙夜に牙をむかないと、どうして言いきれん？ 得体の知れない集団が隣の夙夜を監視しているというだけで、恐ろしく危険な事じゃないのか？

と、シリアスな思考の最中に、マイペースな台詞が飛び込んできた。

「マモルさん、お風呂入りに行こうよ」

「はぁ？」

「大浴場がね、夜10時には閉まっちゃうんだよ。もう9時半だからさ、あと30分しかないんだ」

ああ、そうだ。確かにその通りだ。

今日一日でどれだけ冷や汗をかいたか分かんねえ。それを流してさっぱり……ってのがいいだろう。

「おい夙夜」

「なあに、マモルさん」

このやり取り、何度繰り返したとか。

「オレはオマエのせいでシリアスな考察をしてんだが、オマエはどうしてもそれをぶち壊したいらしいな」

「いいじゃん、もうやめよう。そんな深刻な顔、マモルさんには似合わないよ？」

だからオマエ、その台詞……天然タラシか。

オレは本日最大のため息をついた。

05 .. 必然的な悪夢の再来

次の日、オレが目を覚ましたのは、部屋の扉の外が異常なまでに騒がしかったからだ。

目を開ければ見慣れない天井。寝ころんだまま顔を横に向ければ、間の抜けるようなマイペースな寝顔。

そう言えば、ここは京都だった。

研修旅行中だという事を思い出してから、昨日伏見稻荷で遭遇したヤツの事を思い出し、非常に不快な気分させられた――この憂さ晴らしは、隣で幸せそうな寝息を立てるマイペース野郎の睡眠を妨害するという非常に短絡的な手段を用いて行ってもいいだろうか、そう思って起き上ったオレは、隣の夙夜を叩きおこすどころか、周囲の状況を把握して、息をのんでしまった。夙夜の耳に大声を叩き込んでやろうという、一瞬前までの計画とは裏腹に。

「な……！」

目の前を埋めているのは、ふわふわと舞う小さな白い欠片たちだった。

その正体は、原形を留めないほどまでに微塵となった障子紙。畳の表面は、今の今までオレが眠っていたふかふかの布団を避けるようにして、何かに切られたかのような傷が無数に走っていた。

はっと振り返れば、頭の上でそれなりにまとめておいたはずの荷物が引き裂かれ、無残な様相を呈していた。

「起きろ、夙夜！」

憂さ晴らしでなく、状況を把握して把握させるため、夙夜に向かって怒鳴った。

しかしながら、まるで何かが暴れまわったかのようにズタズタにされた部屋の中、隣ですうすうと寝息を立てるマイペース男。

コイツは耳も目も常人にはあり得ないほどいくせに、一度寝てしまうとその能力は完璧に封印シャットアウトされてしまうようだ。

えーい、ちくしょう、めんどくせえな！

「起きやがれこのマイペース野郎っ！」

オレは今の今まで頭の下に敷いていた枕を、夙夜の顔面に向かって何の躊躇いもなく投げつけた。

ぼふん、と鈍い音がして、周囲に散っていた障子紙の破片が部屋中を舞うように飛んだ。ふわふわと綿毛のように降ってくる。

と、夙夜が包まっている布団がもぞもぞ動いた。

「んー……あー……」

意味不明な呻きと共に、布団から手がゆつと伸びて、つい今しがたオレが投げつけた枕をずるりと動かした。

「んー、おはよう、マモルさん」

どうやら寝起きが悪いというわけではないらしい。

要するに、始業式に來なかつたり、面倒な保健体育のテストが一時間目にある日に遅刻したりした理由は、寢坊ではなく故意にだという事だ……と、そんなこと、今は関係ねえ。

「おはよう、夙夜。だが、吞氣に挨拶する前に周囲の様子に気付け」
言われて寢癖頭の夙夜はぼんやりとあたりを見渡し、氣の抜けるような声を出した。

「んー、あー、うわあ、へえー……」

「これまでの経験から、今のうちに聞いておく。これは、何だ？」

「何だ、って聞かれても……ええと、障子紙の破片？」

夙夜は頭の上にふわりと落ちてきた白くてふわふわしたモノをつまんで答えた。

「違う」

オレが聞きたいのはソレじゃねえ。

「これは、いったい、何の仕業だ？」

何、と言ったのはすでにオレの中に仮説が成り立っていたからだ。障子紙を引き裂き、畳に無数の傷を走らせ、オレの荷物を見るも無残な姿にしてくれやがった犯人に、オレは心当たりがあった。

「これはきつと珪素生命体だねえ」

「……だろうな」

予想通りの答えに、オレは白くてふわふわした紙の欠片を叩きながら布団から這い出た。

畳に走った傷が掌に当たってざらざらとする。

こんな状況は——つまり、珪素生命体が絡む事件に巻き込まれるのは——初めてではない。しかも、白根の同僚だという男に連れられた珪素生命体のキツネ少女に遭遇するという伏線まで張られていたのだ。

落ちつけ、『口先道化師』。ビークール。

なにしろ、頭に血が上った時点でオレの負けは決定するんだから。布団の上に座り込んで部屋を見渡している夙夜は、のんびりと言った。

「これだけ荒されたのはこの部屋だけみたいだけど、他の部屋では盗難があったみたい。みんな廊下に出てるよ。警察にはもう連絡したみたい——あ、先生がこっちくる」

便利なのか不便なのか、並はずれた聴力を駆使して一瞬で状況を把握した夙夜は、ぱっと部屋の入口を見た。

その瞬間、がらりと部屋の戸が開けられる。

「柊、香城、起きているか？ お前達の部屋は——」

様子を見に来た教師の声はそこで途切れた。

それほどに、オレたちの部屋の様子は飛びぬけて悲惨だったって事だ。教師が青ざめたところを見れば、夙夜のような特殊能力がなくなっただけで分かるぜ。

オレ自身が確認したところによると、ずたずたに引き裂かれたカバンからは何もなくなっていなかった。サイフは少々傷ついているが、携帯端末は完全に無事で、衣類などがとられた様子もなかった——引き裂かれて、見事なパンクファッションになっていたが。

それに対し、オレたちの部屋以外では、これほどひどく荒されて

いる様子はないものの携帯端末をこつぞりと奪われ、さらにサイフ、カードケース等の貴重品は軒並みとられたとのことだった。

特に携帯端末は国家に管理される個人識別チップを搭載している。運転を即時強制停止しなければ、とんでもない事態を引き起こす可能性が高い。

教師は生徒全員を大広間に集めて待機を命じた。

早朝からこの騒ぎ、それも被害は甚大で、オレと夙夜の部屋の様子からするに犯人は刃物を持っている可能性がある、という事で何をする暇もなく緊急に集められたオレたち生徒は、みな一様に旅館の浴衣姿だった。

朝食もまだだったが、さすがに文句を言うものもおらず、特に携帯端末を盗られた生徒は蒼白な顔で黙り込んでいた。そのため、100人以上の生徒が押し込められているにも関わらず、大広間はひそひそと内緒話をするような声しか漏れていなかった。

大広間の端に陣取り、柱にもたれかかったオレは、隣で相変わらずへらへらと笑う夙夜に向かって静かに問う。

「オマエ、あれだけ部屋が荒らされて何も気づかなかったのか？」

「うん、寝てたから」

「……そうか」

「マモルさんだって寝てたじゃん」

「……」

オマエに言われたかねえよ。

にしても、夙夜はひどく耳がいいといえ、小さな物音で起きるというわけではないらしい。

それはそうだ、あんな聴力を持ちながらいちいち物音で起きていたら夙夜は一生眠れないだろう。起きている間の能力が高すぎる分、眠っている間はシャットアウトして完全に封じ込めて回復に徹する、とかそんな感じの解釈でいいだろう。

ああ、なんて陳腐な推理だ。まるで名探偵には向いていない。

「じゃあ、いくつか質問してもいいか？」

「んー、いいけど、そろそろ先生が俺とマモルさん呼びに来るよ。話が聞きたいってさ」

「……オレもオマエも寝てたのにか？」

「んとな、警察の人がぜひにつて」

警察。

その単語でオレはさつと青ざめた。

珪素生命体関連の事件で警察にお世話になったのは、つい先日のことだ。

あの時は夙夜の叔母である国家権力だとかいう香城珂清さん（いっじょうかすみ）のおかげで助かったが、オレたちが今いるのは京都だ。とても助けてもらえとは思えないし、二回目ともなると偶然という逃げ道があるとも思えない。

警察を敵に回すのか？ それとも正直にすべて話してしまうのか？ オレたちはすでに、これまでの調書でいくつもの嘘をついてしまっているのに、今さら……？

「夙夜」

「分かってるよ、マモルさん。俺は何も喋ったりしないよ……に、気を付けるよ」

不安な語尾だな、オイ。

しかし、言いきらずに分をわきまえただけでも成長したと言えるだろう。

へらへらと笑う夙夜を見てため息をついた時、夙夜の言ったとおりに呼び出しがかかった。

大広間の反対側では、白根が相変わらず表情ないアーモンドの瞳でオレたちを睨みつけていた。

この時オレは心の片隅で気づいていた。

夙夜が確実に、周囲に対して関心を持ち始めていること。

無関心であったはずのケモノが、珪素生命体関連（シリカ）の事件に際し、オレの考えに沿って行動するようになったこと。

——『道化師』^{ドエロ}さんは、ケモノを従える事も出来るのです。

そう言ったのは、半端敬語の可愛らしい先輩だったけれど。

目の前にいるマイペースなクラスメイトの無関心を破壊するのが怖くて、気づかないフリをしていた。何しろ、オレの目の前にいるのは『野生のケモノ』。無関心という最後の盾が破られれば、そこに残るのはおそらく人間ではない。

だから、微かな予感に蓋をして、見ないフリをして、無理に忘れ去っていた。

そんな陳腐な誤魔化しが長く続かない事にだって、心の片隅で気づいていたにも関わらず。

06 .. 最上級の既視感をもたらすクローズドルム

息詰まる沈黙の中、オレたちは畳敷きの部屋に通された。片付けたのか、警察のために新しく用意したのかは知らないが、荷物も何もなく、浴衣姿の俺達が入るには少しばかり整い過ぎていた。

ああ、空気が重い。

朝早くから呼び出されたと推察するが、嫌そうな顔一つせず座っている警察の方、約二名に対しては畏敬の念すら抱いてしまいそうだ。

教師に促されて、警察官の向かいに座る。

「ひいあきる柊護しゅうじょむくやくんと香城夙夜しゆくやくん、かしら？」

問われたが、だんまりを決め込んだ。

おおよそ警官らしからぬ、ねっとりとした絡みつくような甘い声。警察官なんだろうけれど、淡い茶色に染めて軽くパーマをかけた髪といい、ふわりとした印象の若い女性で、身分証明のため懐から出して提示した黒塗り金紋章の警察手帳はまるで似合っていないかった。

それより、いちいち手帳を眼前にさらさなくてもいいと思うのだが、これはもしかするとマニュアルに沿った行動なのだろうか。

「はじめまして、京都府警刑事課の溝内と言います。こちらは一連の盗難事件担当の小暮です」

警官の制服姿を見るだけで、先日の出来事が蘇るというのに――あの血濡れの裏庭とか、絶対的な切断面とか。

ああ、キモチワルイ。

前回と違うのは、警官の一人がスーツ姿の女性だという事くらいだろうか。

「……はじめまして」

オレが全身全霊を賭けて警戒している事は伝わっているだろうが、溝内と名乗った警官は、にこやかに笑いながら机の上に紙の束をどさりと置いた。

「申し訳ありません、先生方は席を外していただけますか？」

そう言って部屋にオレたち二人だけを残した婦人警官溝内は、机の上に置かれた紙をぱらぱらとめくりながらにこりと笑った。

紙の束の表紙には、オレと夙夜の写真。それに、もう一冊は先輩の写真が貼られている。

それだけで、ソレがいったい何に関連する資料なのかが分かった。内容が気になるところではあるが、おそらく夙夜が覚えるだろうから、後で聞けばいい。予想していた事だが、警察が現在オレたちに関してどこまで知っているかというのは非常に重要なフアクターだ。

「先に言っておきますが、オレも夙夜も寝てました。夜中に何が起きたかという事は、何も分かりませんから意味なんてありませんよ。オレたちの方が何が起きたか知りたいくらいです」

高校生らしく反抗的を装って。

「本当ですか？」

「嘘をつく理由がありません」

今のところは。

夙夜はオレと溝内さんの事を無視して、机の上の書類を読むでもなく、ただぱらぱらとめくりはじめた。

「『嘘をつく理由がない』……ですか。まるで漫画にでも出てきそうな台詞ですが、まあいいでしょう」

あ、その突っ込みはなんだか悔しいぞ。

「私、回りくどい事は苦手ですから、無駄な話は省いてはつきり言います。今回の盗難事件には珪素生命体シリカが関わっています」

溝内と名乗った女性警官は、ふわりとした印象と裏腹にずばりと切りこんできた。

かなり頭の切れる人なんだろう。

「そして今回、お二人を呼んだのはお願いしたい事があったからです」

ああ、さっきから嫌な予感しかしねえ。

「監視を付けさせて頂いてもよろしいですか？」

監視、ときたか——最上級の既視感^{デジャヴ}がオレを襲い、アーモンドの瞳が想起する。

「ここ最近京都で盗難事件が頻発しています。盗難は携帯端末が中心なのですが、セキュリティに関係なく入り込んでいる事、残された痕跡等から、犯人が有機生命体^{タンソ}ではあり得ないと分かっています」
てきぱきと証拠と思われる書類をテーブルに並べたてる溝内警官。びっしりと文字が書き込まれており、ところどころ日本語以外の言語も見える。こうやって並べ立てたのはおそらく、雰囲気演出するためのものだけで、高校生風情にこの書類が理解できるなど、ましてやすべて丸暗記出来るなどとは夢にも思わないのだろう。

「あなた方が関わっていた『リリン』という識別称を持つ珪素生命^{シリ}体のこと、4月に桜崎高校で起きた事件の概要、調書を調べさせていただきました。そもそも、一般的にも珪素生命体^{シリカ}に一度関わった人間の元に他の珪素生命体^{シリカ}が現れると言われていることはご存知ですよ？ 日浦で多くの珪素生命体^{シリカ}と共に暮らした花房博士の話は非常に有名でしょう」

「……」

オレは答えない。

夙夜もへらへらと笑っているだけだった。

返答がない事は予見していたかのように、溝内警官は臆することなくそのまま続けた。

「お答えいただけないとは思いますが、私の見立てではお二人が遭遇した珪素生命体^{シリカ}の数は現在知られている中では飛びぬけて多いと考えています。盗難に関与した珪素生命体^{シリカ}はこの付近に潜伏している可能性が高い」

さらにオレはだんまりを決め込んだ。

夙夜は机の上の書類をじっと見ていた。

と、ここで、いったん考察をいれる。

オレと夙夜の写真が貼られた書類、これはおそらく二人に関する

調査書であろうと思われる。が、まだ夙夜の能力についてはバレていないようだ。しかし、世間には通り魔の犯行と報道された萩原加奈子が、実際は珪素生命体シリカに殺されたのだという事が知れている。萩原を殺したシリウスについてどれほど分かっているか、梨鈴だけでなく梨鈴を消滅させた珪素生命体シリカについてどれほど知れているかは分からない。

しかし、『お答えいただけにと思いますが』『考えています』……言葉の端々に、この人自身の判断であろうという言葉が伺えろと、いうことはギリギリだな。

そう結論付けて、オレは口を開いた。

「溝内……えーと、溝内警部？」

「ただ溝内と呼んでいただいて結構ですよ、柊くん」

笑みを張り付けた溝内さんは、ようやく返答したオレに満足したらしく、少しばかり身を乗り出した。

「要するに、盗難事件が珪素生命体シリカ関連で困っていたところに、オレたちみたいな都合いい高校生が飛び込んできた。これを利用しない手はない、ということですね」

何とも分かりやすい事で。

「だからオレたちに囧になれ、というそういう事ですね？」

「ひらたく言うとそのです」

溝内警部はきっぱりと言い切った。

ここまでするといっすすがすがしい。

「調書を読ませていただいた時思いましたが、柊護さんつぐむさむ、あなたはとても頭の回転が速いようです。そして、非常に聡く、何より、冷静でいようとしているのが垣間見える。それが一番素晴らしい。今も、こうして私と相対しながら様々考えていることでしょう」

「……それは褒め言葉ですか？」

「ええ、もちろん。ですから、いろいろとお伺いしたいところです
が、聞いても答えてくれないでしょう事も分かりました」

「別にいいと思うよ、マモルさん」

それまでぺらぺらと書類をめくっていた夙夜が唐突に口を挟んだ。ふむ、コイツがそんな風にいる時は、まあ、大丈夫なんだろう――最も、面倒な事に巻き込まれるという点においては相違ない。

経験則だ、経験則。

もしここで断つても警察がオレたちをマークするのは時間の問題。^{シリカ}珪素生命体と一度関わりを持ってしまったら、芋づる式に仲間が集まってくるのは、身をもって体験している。

オレたちは既に抜けられないループにはまりこんでしまったのだ。

「そう言ったんなら手伝えよ、夙夜」

「分かってるよ、マモルさん」

にこにこ笑うコイツと心中でもしようってのか？

とても正気の沙汰とは思えねえ。

もしかすると、梨鈴が消えたあの時、とつくに覚悟を決めていたのかもしれないけれど。

「いいですよ、溝内さん。監視でも何でも」

「ご協力、感謝いたします」

にこりと微笑んだ溝内警部は、スーツのポケットから携帯端末を取り出した。

「その端末をお持ちください。監視の指揮はこの小暮がとります。あなた方に迷惑をかける事はありません。学校にはすでに許可を得ています。必要な情報はすべて端末に記録してありますが、何かご質問があればなんなりとお聞きください」

まるで箇条書きのように要件を述べられた。

一瞬で退路を断つように。

「では、よろしく願います」

このふわりとした笑顔に、何もかも騙されているような気がする、とは口に出せなかった。

ようやく解放されたオレたちはまた大広間に戻された。オレは、

真っ先に白根を探す——と思ったが、その必要はなかった。

「柊護さん、香城夙夜さん、お話があります」

すぐに淡々とした声で呼びかけられ、振り向いたオレたちを浴衣姿の黒髪美人が待っていた。

さすがに事件から時間がたっているからか、先ほどまでは沈鬱としていた大広間はざわざわと騒がしくなっている。多少大きな声で話しても気づかれないだろう。

「……白根。オレの方も話がある。だが、この場ではまずい」

「大丈夫だよ、マモルさん。今日はもうすぐに自由行動に戻るから」「そうか」

もうコイツの発言にも慣れて来てしまった自分がいる。なんて便利な能力だ。

慣れてって怖いな。

「あと、オレたち誘われるから3人で行動するのは無理かも」

「……は？」

「うん、一緒に行きたいって言ってるからさ」

「……主語をつける、夙夜。誰がそんな事を？」

「えーと、あの、左の隅っこに固まってる集団」

ああ、そうですか、この騒がしい中でピンポイントにオレたちの話題をピックアップしてくれたわけか。

前言撤回。

やっぱりこの感覚にはまだついていけそうにねえ。

07 .. 才女の友人と思わぬ伏兵と

そして数十分後、オレたちは何事もなかったかのように3人でホテルを出発した……と、言いたいところだったが、残念ながら夙夜の予言したとおりの団体行動だった。

応援団所属のやたら暑苦しいクラスメイト、やじまたかひろ矢島隆弘のグループがなぜかオレたちに合流したからだ。

どうやら目的は、見た目だけなら極上の美人転校生である白根葵。それから、これを機会に、普段オレや白根とばかり行動している夙夜と話してみたいという女子生徒。

なぜわざわざこのマイペースや無表情と行動しようとするんだ。やめておけ、と言いたい。

しかし、気づけば全部で8名という大所帯になっていた。

「今日は朝から大変だったな。どうする？ 黒田と土方がサイフを取られたから、あんまり遠くへは行けないんだが」

地図上の位置は知らないが、『三条川端』なる場所にある宿を出てすぐ応援団の矢島に聞かれたオレは、即座に首を横に振った。

予定なんて、あるわけねえ。

むしろ、お前達と別行動するのが予定だったんだが。

そんなオレの様子を見た応援団の矢島は肩を竦めると、日焼けた顔に白い歯も目立たせて、豪快に笑った。

「俺は運動の神がいると言われる『白峯神社』へ行きたいのだが」「白峯神社？」

オレは手持ちの地図をぺらぺらとめくる。

白峯神社、白峯神社……おお、本当だ。へえ、もともとは蹴鞠の神、転じてサッカー、スポーツ全般の——って、ちよつと待て！

「バカ野郎、白峯神社つつたら堀川今出川じゃねえか！」

そのまま地図を矢島の顔に叩きつけてやる。

しかしさすがに応援団、矢島はそれを何事もなく受け止め、首を

傾げた。

「堀川今出川？ どこだそれは？」

「……金のないオマエ達に教えてやろう。ここから直線距離でいたい3キロ、道なりなら5キロだ。矢島、オマエそこまで歩く気か？」

「5キロか。走れば15分だな！」

「じゅうごつ……！ それはオマエだけだこの体力バカの応援団があっ！」

思わず普段以上の運動能力を発揮して、オレは矢島の側頭部に蹴りを叩き込んでいた。

しかし、ほんの少し傾いだけで、すぐに体勢を立て直した矢島に夙夜と同じ種類の鈍感さを感じ取る……おい、またボケ属性か？ オレみたいな半端な突っ込み、それも運動不足の文化部にはかなり厳しいんだが？

頼むからこれ以上オレの心労を増やさないでくれ！

「5キロねえ……往復10キロ、お金もないから、丸一日かけて往復するにはいい距離なんじゃないかな。ねえマモルさん」

「ややこしくなるからオマエは口挟むんじゃないやねえ、このマイペース野郎！」

「香城夙夜さんがそうおっしゃるなら、私はそれに従います」

「そしてキサマはもっと主体性を持って、しらねあおい白根葵！」

オマエがそんな事を言ったら……！

「白根さんがそう言うのなら、それでいいけど？」

「俺もー」

オマエ目当ての黒田と土方が賛成側に回るだろうがあ！

「相澤、大坂井、10キロも歩く事になるぞ?! いいのか?!」

頼みの綱は残り二人の女子。

「あたしはいいよ。あいざわあい運動になるし」

しまった、相澤藍は女子陸上部の長距離選手じゃねえか。日に焼けていてすらりと長身、オレと目線が一緒の相澤にとって10キロ

など全く問題ないらしい。

「アイちゃんがいいなら私も歩くー」

相澤の親友である大坂井美穂^{おおざかい みほ}もあっさり承諾し、10キロという数字を見ただけで全く歩く気を失くしているのはオレ一人だけらしい。

よし、これでコイツらと別行動……なんてわけにいかねえだろ、この場合。

惨敗。

「……」

オレは無言で敗北を承諾した。

黒田と土方に囲まれて歩く白根——コイツは相変わらず無表情だ。運動部コンビ矢島と相澤の会話をにこにこ聞いているフリをしている夙夜の後姿を見ながら、凄まじく不機嫌な表情で歩いていたからだろうか。

「不機嫌そうだね、柊くん。白根さんが気になったりするの？」

「ああ？」

なぜオレがヤツの心配をせねばなんのだ？！

背の高い相澤と並んでもひどい身長差が目立つ大坂井、オレはあまりの背の低さに愕然と見下ろした。先輩といい勝負……いや、もっと低いだろう。

まるっこい顔に丸い目。高校生というより、小学生と言っても通じてしまうだろう。

「冗談だよ。柊くんは白根さんの事、そんな対象としてみてないもんねえ」

「分かっているなら言うなよ、大坂井」

「ごめんごめん、だって柊くん、楽しそうなんだもん」

「どこがだっ……」

思わず頬を引きつらせると、大坂井はさらに楽しそうに笑った。

先輩といい大坂井といい、どうやらオレは背の低い女性にはいいように弄ばれる運命らしい。

サクラの樹はとくに花もなく、青々とした葉が茂っている。狭い歩道だというのに、どうにも京都は自転車が多すぎる。先ほどからベルを鳴らされては歩道の端に寄りながら、オレたちは川沿いのんびりと北上していった。

小さい大坂井など気を抜けば跳ね飛ばされてしまいそうだ。

そう思って少しばかり周囲を警戒する。

と、その瞬間、自転車でない別のモノを見つけてしまって苛立つ——くっそ、本当に監視してやがる。

「でも、今朝は本当に大変だったねえ。柊くんの部屋も、ドロボウさんが入ったんでしょう？」

ドロボウさん……いやいや、突っ込むな。

「ああ、朝起きたら部屋中めちゃくちゃだ。服もずたずたで、コレもクラスのやつに借りたんだ」

オレは少しばかりサイズの合わないTシャツの襟首を引っ張りながら言った。

ついでに逆の手で転びそうになった大坂井の腕を軽く引き、立たせておく。

「何しろ夙夜ときたら、叫んでも起きやしねえし、枕ぶつけて起こしてやっても悪びれもしねえし、あれだけ荒されたのに起きやしねえし」

「起きなかったのは柊くんもいっしょだよね」

「そこ突っ込むじゃねえよ、大坂井」

「柊くんは面白いねえ。香城くんも面白いけど」
面白いと言われたのは初めてだ。

「アイツはただのマイペースだ」

「私は白根さんとも話してみたいけど、どうしてもうまくいかなくて」

「アイツとコミュニケーションとるのは無理だ。オレはとくに諦

めた」

「そうなの？ 仲よさそうなのに」

「白根の興味の対象はオレじゃねえ。夙夜の方だ」

あくまで監視目的で、だが。

「もしかして柊くん、拗ねてるの？ 一人だけ仲間外れだから？」

「……はあ？」

オレは思いつきり眉を寄せた。

なぜオレが。

と、あぶねえ、信号赤だ。

先に行ってしまった矢島たちは気づかず歩いて行ってしまったが、さすがに信号無視はヤバイ。というわけで大坂井と共に立ち止まった。

「優しいんだねえ、柊くんは」

「な、何を……？」

唐突な大坂井の言葉に、オレはうろたえた。

「だって、私のことを気遣って、ずっと周囲に気を配ってくれてるもんね」

オレは絶句した。

そんな様子を見て、大坂井はまたくすくすと笑う。

「女の子はね、分かるんだよ。隣にいるヒトがちゃんと自分の事を考えてくれてるかどうかって」

「……そんなもんか？」

「そういうものだよ」

大坂井の邪気ない笑顔を見下ろしながら、オレは困惑した。

そして、ほんの少しだけ、なぜだろうか、頭の片隅で、あの、半端敬語の先輩を思い出したりしてしまっている。

「お礼にね、教えてあげるよ」

「何をだ？」

「あのねえ……昨日ね、私、見たの」

大坂井は、オレの服の裾をきゅっと引っ張り、つま先立ちしてオ

レの顔を引き寄せた。

耳元に、ひそりと。

「珪素生命体」

「?!」

大きな丸い眼がオレに笑いかける。

「ねえ、柊くん。この間さ、加奈子が死んだよね」

「……」

オレは完全に油断していた。

「警察のヒトは何にも言わなかったし、事件そのものがなかったみたいになっちゃったけど」

桜崎に現れた珪素生命体を見た人間は、オレたちだけじゃないって事をすっかり忘れていた。

「私、その時も珪素生命体を見たんだ」

大坂井の手がいつしかオレのTシャツの裾をぎゅっと掴んでいた。

そうだ。相澤藍と大坂井美穂とおおさかいみほと萩原加奈子。あんな事になる前は、いつも3人一緒に行動してたんじゃないか？

そして、大坂井は確実に、確信をもってオレに的を絞っている。

「柊くんはずっと珪素生命体の梨鈴ちゃんと一緒だったけど」

「……」

「何か知らない……?」

大坂井の言葉がオレの脳を揺さぶる。

心臓の音が、耳元で鳴り響いていた。

08 .. 5体目の珪素生命体

大きな丸い目がまっすぐにオレを見上げてくる。

逃げられない。この真っ直ぐな感情から逃げる事が、オレにはできない。

「大坂井、オマエ……」

拍動が速い。

何故だ？ 何故、警察でも白根のような組織でもない普通のクラスメイトがオレに向かって珪素生命体の事を問う？

「柊くん、私ね」

心臓が速い。

「加奈子のこと、大好きだったんだ」
ずきり。

胸の痛みと同時に、当時オレがしようとしていた事を思い出した。それは、オレの感情一つで萩原加奈子を殺めた珪素生命体^{シリカ}を無罪^{アヤ}放免しようとした事。遺された者達の気持ちを二の次にして。シリウスが自ら消滅しなければ、購われる事のなかった罪——オレ自身、の罪。

大坂井が言っているのはそういう事だ。

珪素生命体^{シリカ}を優先させるといふあり得ない選択をした、オレの罪。真っ直ぐに見つめてくる大坂井の目を見られないのは、そのせいだ。

ところが、大坂井はふいに目を細めて、オレの服の裾をぱつと放した。

「なんてねっ！ ちょっと試みてみただけだよお」

そして、代わりにオレの手を自然にとり、青信号の横断歩道を駆けだした。

「はやく行こう！ アイちゃんたちに置いて行かれちゃうよ！」
オレの手を握りしめた大坂井の手はひどく冷たくて、まるでオレ

を責めているかのようにだった。

ちよつと言ってみただけ、なんてそんなはずはないのだ。大坂井の視線は、確実にオレを非難していた。本当は何があったのか分かっているかのようなあの瞳――分かるはずなんて、ないのに。

信号から少し歩いた場所で、相澤が腰に手をあてて待っていた。

「柊も美穂も遅い！ 置いてくよ！」

「ごめーん、アイちゃん！」

小さな大坂井の手に引っ張られながら、オレはもう戻れない事を確信した。

警察どころか、クラスメイトにさえ本当の事を話せない。

オレは、これからすべてを抱えて生きていくんだ。もしかすると、これからもっともっと、この胸の奥の澱みを増やしながら。

普通の高校生だったオレは、どうしようもなくどうしようもない不安に苛まれていた。

前を行く夙夜が、ふつと振り向いて何かをオレに呟く。

聞こえなかったけれど、オレを落ち着かせようとしているように感じたが、そのすべてが遠かった。白根がこちらを鋭いアーモンドの瞳で睨んでいたが、ひどく遠い世界の出来事のように思えた。

何で、オレが。

ごくごく普通の、どこにでもいる高校生。それがオレのポジションだったはずなのに。なぜ警察に嘘をつき、監視され、白根の同僚の関西弁野郎に狙われ、クラスメイトに隠し事をして非難され。いったいオレは何をやっているんだろう？

いつの間にか大坂井はオレの手を放し、相澤の元へと走っていた。すると、白根に話しかけながら（もっとも白根は全く相手にしていないが）、歩いていた黒田が大きな声で言った。

「なあ、この森みたいのって、なんだ？」

街中を歩いているはずなのに、いつの間にかオレたちの右手にはこんもりと茂る森のようなものが現れていた。それも、高いベージュ色の塀に囲まれている。

「これは京都御苑とも呼ばれる宮内庁管轄の管轄下にある、もともと歴代天皇の居所・執務所として使われていた京都皇宮を含みます。西暦794年に京都遷都した折に端を発し、江戸時代には二百もの宮家や公家の邸宅が立ち並ぶ町になりました。明治時代に天皇が東京へ移ってから住居として使われていませんが、現在も建造物は多く保存されています」

「ああ、これがかの有名な『京都御所』か！」

でかい声で京都御所と京都御苑をごた混ぜにした矢島が、京都御所について名前以上の事を知っているとは思えないが。

「せっかくだから中を通して行かないか？」

「あ、いいねー！」

応援団矢島の提案は二つ返事で承認され、オレたちは少々進路を変えた。

アスファストの道を抜けて、砂利が敷き詰められた京都御所の広い道を大きく広がってざくざくと歩いていった。

ああ、やっぱり夙夜は楽しそうだ。

砂利道が一步ごとに音を立てるのがそんなに嬉しいのか、それとも道なのにサッカーグラウンドかと思紛うようなこの広すぎる道が楽しいのか、それとももっと別に理由があるのか。

オレは改めて天皇という存在が持つ権力を肌で感じていた。

中央を貫く健礼門前の大通りの真ん中に立つと、1000年以上前の都の雰囲気伝わってくるかのようだ。ここを公家の行列が通っていたっていうのは、きっとウソではない。

夙夜は嬉しそうにきよろきよろとあたりを見渡し、へらへらと笑いながらオレを振り向いた。

「すごいねえ、マモルさん。広いねえ」

やっぱり広いのが嬉しかったか、そうか、そうか。

ここでスキップしたら置いてくからな、夙夜。

じっとりとした目でヤツを見ていたせいだろうか。

「柊くんはまるで、香城くんのお父さんみたいだねえ」

隣で大坂井がくすくすと笑った。

先ほどの尋問の事など忘れてしまったかのようなその明るい笑顔に、オレは余計に不安を掻き立てられる。

「お父さんて何だよ、お父さんて」

確か、前にも同じ事を言われたな。

と、楽しそうに歩き回っていた夙夜が唐突にオレの方を振り向く。

「マモルさん、俺、あんみつ食べたい」

「あ、あたしも食べたい」

間髪入れずに相澤が同意した。

この甘党どもが……！

「あんみつかー。いいっすね！ あ、白根さんもうすか？」

「香城夙夜さんが参加するならば、私も同意します」

その台詞で、白根の両サイドを守っていた黒田と土方が凍りついた。

やめろ、白根。本気とはいえ二人がかわいそうだ。そして、いろいろ誤解するだろ？ 大坂井なんぞ、オレを3人の内で仲間外れと称したんだぞ……！

と、説教は後でいい。

「……仕方ねえな」

オレは大きいため息をついて、携帯端末で付近の甘味処を検索し始めた。

そんなオレを見た大坂井は、さも可笑しそうに笑った。

「柊くんは、みんなのお父さんみたいだねっ」

「そりゃどーも」

携帯端末での検索を終えたオレは、周囲と地図を見比べながら店の場所を確認する。

徒歩5分。

やな予感なんてずっとしてる。

「そしたら、そっちの門から出て左……に……」
指さした先、門の下。

オレを追い詰めるイベントが途切れることなく続いていた。

まさかとは思うが、夙夜、完全に分かったよな？

「珪素生命体……」

最初に呟いたのは大坂井。

蒼白な顔で、再びオレの手を握りしめた。

その瞬間、ずっとオレたちをつけていた警察が動いた。

同時に白根も動く。女子高生からはかけ離れた運動能力で地を蹴り、珪素生命体との間合いを詰めた。

門の下にただ立っているのは、銀色の髪、和服に身を包んだ少年。和服の下に薄手のパーカーを着て、フードを出してすっぽりとかぶっていた。

しかし、珪素生命体を知っているオレたちからすれば、その目立つ服飾以上に雰囲気人間離れしているのがすぐ分かる。ぱっと見ただけでは分からないが、きっちりと被ったフードの奥、その髪の間から、ヒトにはあり得ない筈の長い耳が覗いている——あれはきつと、ウサギ。色の白い肌に真紅の目は白い毛並みのウサギそのものだ。

そのウサギ少年は、迫ってきた白根と私服に身を包んだ警官にちらりと目を向け、ひよい、と軽く跳んだ。

それだけで数メートルの高さがある門の屋根に軽々と飛び乗った。オレに吹っかけられた災厄は、とうとうこんな京都の街の下真ん中まで珪素生命体^{シリカ}を連れてきやがった。

「どうしてこんなところに珪素生命体^{シリカ}が……？」

桜崎高校に出入りしていた梨鈴のおかげで、クラスメイトたちも珪素生命体^{シリカ}に耐性がある、とはいってもさすがに全員驚いている。

しかも、その珪素生命体^{シリカ}に白根と見知らぬ男性——実際は警察なのだが——が飛びかかっていったという非現実的な光景に、誰もが言葉を失っていた。

「マモルさん、あれ、犯人の半分だよ」

おーい、夙夜、オマエいい加減にしろよ。

「犯人？ 何の犯人だ、香城？」

「今朝の。警察のヒトが言ってたよ」

「何?! そう言えば、香城と柊は今朝どこかに呼ばれていたな。」

その時か？」

「うん、珪素生命体^{シリカ}の仕業だったらしくてさ。俺とマモルさんが前にリリンと一緒にいたのを知って話が聞きたいって呼ばれてたんだ」
いつになくすらすらと喋る夙夜が、嘘をついていないのがすげえ。
確かに警察に呼ばれたのは、梨鈴と一緒にいた事が理由だ。そして、あの珪素生命体^{シリカ}が犯人だというのも、夙夜が言うのだから本当なのだろう。

しかし、犯人の半分……？

落ちつけ、道化師。考えろ——オレは京都に来てから何度目か分からない台詞を口の中で呟いた。

「アオイさん、あのままじゃ警察のヒトと喧嘩になっちゃうけど、いいのかなあ？」

「いや、よくねえだろ。夙夜、オマエ止めろよ。アイツ、オマエの言う事しか聞かねえよ」

「んーでも、昨日のケーキさんがさあ」

「誰だよ『ケーキ』って」

「えーと、アオイさんの知り合い、んと、モチヅキケイキ？」

「望月……ああ、アイツか、それがどうした。とにかく止めろ」

ものすごく聞きたくない名前を聞いてしまい、思わず不機嫌なまま夙夜に命令した。

夙夜はそれを聞いて、いつものようにへらへらと笑った。

「しょーがないなあ。じゃあ、マモルさんのために頑張っちゃうよー」

だからその台詞……これ以上クラスメイトたちに誤解させんじゃねえ！ これじゃまるでオレがホモみたいじゃねえか！

オレは今にもその場を逃げ出したくなった。

09 .. ナゾのシリカ・ナゾのコドモ

オレはいつたい、何体の珪素生命体シリカと遭遇すれば気がすむのか。梨鈴に始まり、イズミ、シリウス、そして昨日のキツネ少女とこのウサギ少年——これで、通算5体目の珪素生命体シリカ。遠目に見た、というならともかく……珪素生命体シリカが日本固有種かつ、現在では3万體ほどしかおらず、しかも自然と共に山奥で暮らすのを好んでいる事を考えると、この数は異常だ。

白根の後を追って駆けだした夙夜を見送り、応援団の矢島がオレに問う。

「白根はどうするつもりだ？ あの人である珪素生命体シリカを捕えるつもりなのか？ もしや、俺達も加勢すべきか？」

「それならアタシも手伝うけど？ それとも、白根の方を止めたらいいのかねえ、なあ、柊？」

体育会系の矢島と相澤はすでに闘う気だ。頼むからやめてくれ。そしてなぜオレに問う？

オレは頭痛をもよおし始めた頭に手をあてて、ため息と共に吐いた。

「そんな事は警察に任せた方がいい。白根の事は頼むから夙夜に任せといてくれ。たぶん、白根はアイツの言う事なら聞くから」

「そうなのか？」

「なら放っておくか」

詳しい説明なぞする気はない。

水晶の爪を閃かせた白根に対して異属の反応を示したウサギ少年は、白根より少し遅れて駆けてくる私服警察官を無視して屋根の上から狙いを定める。

敵を見定めるガラス玉のような瞳は、人間のものではない。

数メートルの屋根から、勢いをつけて落下したウサギ少年のフードがはらりとめくれて長い耳が飛び出した。着物の裾がめくれて、

ウサギそのものの足が露わになる。屋根を遥かに凌駕する跳躍力も納得だ。

その足で踏むように蹴りつけられた攻撃を、白根は手にしていた水晶の爪で逸らした。

ぎいん、と凄まじい金属音が響き渡り、その音でオレたち以外の通行人も異変に気づき始める。ざわざわとヒトが集まり始める。

と、次の瞬間、夙夜が白根の足を引っかけた。

ってオイ――?! もっと別の止め方があるだろう?!

まるで漫画のように地面に向かってダイブした白根もほら、怒ってるじゃねえか……いや、あの不機嫌なアーモンドの鋭い目つきはいつもだったか?

「香城夙夜さん、あなたはいつも私の邪魔をするのですね」

「だってマモルさんが止めろって」

オレのせいにすんじゃねえーって、オレのせいだが。

白根は鋭い目を夙夜からオレに向けた。

「……柊護さん、なぜ第二命題を遂行する邪魔をするのですか?」

「いや、邪魔っていうかなんていうか」

しどろもどろ。

いいから早くその水晶の爪をしまえー! ほら、また後ろからウサギ少年が狙ってるだろうが……と、次の瞬間、ようやく追いついた警察官数名が、折り重なるようにしてウサギ少年を捕獲した。

おおっ、と周囲からどよめきがあがった。

いつの間に現れていたのか、女性警官の溝内さんが指揮をとっている。

「すぐにこの場所を隔離しなさい。早瀬、本部に連絡を」

すらりしたとスーツ姿の女性は、てきぱきと部下に指示を出し、ウサギの少年を拘束する。

そして、オレに向かってふわりとした微笑みを見せた。

「お二人がこれほどまでとは思いませんでしたよ、まさか1日と待

たず引き寄せるとは……さすがです」

「……どうも」

ほめられたのか、警戒されたのか。

夙夜が白根を連れてオレたちの方へと戻ってくるのを視界の隅で確認する。どうやら警官との衝突だけは避けられたようだ。

ついでにポケットを探って、朝に手渡されたばかりの携帯端末を溝内さんに差しだす。一度も使う事のなかった携帯端末。

「これで、オレたちは任務完了ですね。これ以上構わないでください。一応、研修旅行中の高校生の身なので」

「あら、冷たいですね。私としては」

溝内さんは携帯端末をオレの方に押し戻し、再びにこりと微笑んだ。

「このまま持っていてほしいのですが？」

「いりません。どうせオレたち、明日には東京へ戻りますから」

「人生何が起こるか分かりませんから」

溝内さんは無理やりオレの手に携帯端末を握らせた。

「今回は協力していただきましたが、今後、貴方がお困りの際は協力させていただきます。ですから、これはぜひお持ちください。私はこれでも京都府警の、そうですね、少しばかり権力を持つ部署におりますから、きっとお役にたてると思います。ちなみに、その端末は私の個人所有物ですから、府警とは何の関係もない、私個人へのホットラインです」

うわあ、超イラネエ。

相当に嫌な顔をしていたのだろう。

隣にいた大坂井がおろおろとしながら、オレの代わりに端末を受け取った。

「ありがとうございます。彼女さんですか？ 可愛らしいですね」

「違います」

すぱりと切り捨てて、全員の様子を確認する。

黒田、土方は無事。白根の行動で少々驚いてはいるが、即行で戻

ってきた白根の左右を固めている。矢島と相澤は言うまでもなく元気に夙夜を迎え、大坂井はオレの隣で携帯端末を握りしめていた。

よし、全員無事。

「マモルさん、あんみつ食べに行こうよー！」

夙夜に至っては嬉しそうに手まで振って。隣の白根は完全に冷え切った目つきで睨んでいる。

「ああ、すぐ行くから待ってろ……行くぞ、大坂井」

「あ、うん……」

大坂井は溝内さんにぺこりと頭を下げた。

というわけで、騒ぎに巻き込まれないよう、オレたちはとっとずらかる事にした。

しかしながら、今の犬捕物で集まってしまった人ばかりを抜けられそうもない。無理やり抜けていくしかなさそうだ。

「もういいのか、柊。警察に話しかけられていたようだが」

「いいんだ。オレの方は興味ないから」

「柊はすごいな、相手は警察だぞ？」

眉をひそめた矢島に問われ、困るオレ。

警察ってモノに関しては、わざわざ楯つきたいわけじゃないが、なぜか反抗せざるを得なくなるばかり。喧嘩したいわけじゃないのだが、なぜかオレをイライラさせてくる。

オレは、全く何も分かっちゃいない。

今までオレが出会ってきた相手のこと——白根や望月の組織の事も、夙夜の叔母が属する国家組織の事も、それから先輩の事も。

でも、感覚的に分かっている。

それらすべてを総合しても、警察っていう組織とは敵対する関係にあるだろう事が。

まあ、だからってわけじゃないが。

「国家権力がどうした。オレはあの組織自体が好きじゃないんだよ」嫌いなわけじゃない。興味もない。だが、周囲はオレを放ってお

いてはくれないのだ。

何故オレが、なんていう問いはすでに何百回繰り返した。

「ははは、柊はまるでどっかの少年漫画の主人公のようだな」

「何でオレが主人公だよ。主人公ってならオマエや夙夜の方が向いてるだろ」

「いやいや、昔から主人公は苦勞する方だと相場が決まっている」

「何だそれ。ま、それならオレがダントツで主人公だって認めてやるよ」

困り果てて苦笑した時だった。

再び人込みから歓声が上がる。

なんだなんだ、と振り向いたオレたちは、先ほどよりさらに奇怪な場面を目にする事になる。

「こんのバカ野郎、ヒナを放せーっ！」

甲高い声が響き渡る。

次の瞬間、取り押さえたウサギ少年を縛り上げていた警官が横向きに吹っ飛んだ。

同時に、ウサギ少年はすぐそこの警官を蹴り飛ばして跳び上がった。

「ヒナっ！ 逃げろ！」

突然乱入した声は、子供のもの。

見れば、派手な色のおもちゃのバットを両手に持った野球帽の少年が警官相手に構えていた。身長など警官の半分しかない、それでも瞳に闘志をたぎらせて、飛び退ったウサギ少年と警官との間に立ち塞がった。

ウサギ少年はフードを被り直すと、その子供を担ぎあげた。

「珪素生命体がっ……！！」

人々の悲鳴も空しく、ウサギ少年は乱入してきた子供を抱きかかえ、門の上まで飛び上がった。

オレは珪素生命体と目が合う——硝子玉、感情のない真紅の瞳。そして、ウサギ少年が抱えた子供とも目が合う——幼いながらも

強い意志を秘めた瞳。

一瞬だけの邂逅。

ウサギ少年とその子供は、一瞬で門の外へと消えていった。

その場が呆然となったのも刹那、警官達は溝内さんの号令の元に珪素^{シリカ}生命体を追っていった。

「何だ、アレは……？」

「今回の盗難の犯人だって言わなかったっけ？」

夙夜の呑気な声。

「まさか半分、って言ったのはあの二人が犯人だからか？」

そのうち一人だから犯人の半分——分かるかあっ！

それよりも。

「今のうちに警察から逃げようぜ。いいな白根、これ以上いたらオマエだって面倒な事になるんだからな」

そして腰を折って、耳元に近付いてひそりと一声。

「組織の事、知られたくなんてないだろう？」

「……了承いたしました」

「よし」

ぽん、と白根の肩に手を置いてため息一つ。

コイツは無駄に知識は多いし、賢いのだが……どうにも頭が固くて仕方がない。任務が目の前にぶら下がった瞬間、他に何も見えなくなってしまうのだ。

マイペースとロボット、それに運動部まで乱入して。

もはや呪われているとしか思えない。

10 .. 京の都の甘味処

最悪の思い出を作った京都御苑から逃れ、オレたちは甘味処へまっしぐら。

警察から逃亡、半ば走るような早足で京都御苑を離れていった。

特に甘党の夙夜と相澤のテンションはすごい。そして、二人の姿はまるで十年來の親友かのような……身長もほとんど変わらない、同じ目線で話しているのが不自然なくらいに自然だ。

——オレはアイツの非日常性を知っているから

あの二人の間にある、消える事のない絶対的な断絶を知っているから。

多少有名だという甘味処も、こんな平日の昼間には空いている。

裏の道に入った場所にあるのも理由だろうが。

夙夜と白根、それから運動部コンビの矢島に相澤、大坂井、黒田に土方。最後にオレ。総勢8人の大所帯だったがすぐに席につく事が出来た。さすがに8人が一緒に座れる席はないので、オレと大坂井だけ少し離れたテーブル。

うう、大坂井の視線が痛い……

「やっぱり京都に来たらあんみつ食べなくっちゃね」
「そうだね」

少し隔てたテーブルでへらへら笑う夙夜と相澤。

大きな隔たりなどどこにもないかのよう。

なぜだろうか、心の奥底がざわついて仕方がない……もちろん、オレが夙夜に恋していて、相澤に嫉妬しているのならば話は別だが、これはそんな感覚じゃない。

ああ、キモチワルイ。

オレの様子を見てって心配そうな顔をした大坂井に返答しようと口を開いた。

刹那。

「しんどそうな顔してんなあ、マモルちゃん。ケモノが普通に会話しとるんがそんなに可笑しいコトかいな」

オレの背筋を貫く悪寒。

この独特のイントネーション。人を小馬鹿にしたような響きを含む軽いもの言い。

じつとりと額に汗がにじむ。

声の主は、隣の席で抹茶パフェにスプーンを突っ込んでる男。黒髪ストレートを細く後ろに束ね、胡散臭い眼鏡をかけて。

「――望月桂樹」

思わず喉が渇く。

「ああ、そんな警戒せんといてえや。ボクがキミの命を狙とるわけやあるまいし」

「柊くん、誰？」

大坂井が首を傾げる。

「マモルちゃんと葵とケモノくんの知り合いや」

「……もともと白根の知り合いで、昨日、オレと夙夜は偶然会ったんだ」

心臓の鼓動が速い。

「偶然？　ちゃうで、必然や。ほれ、ユーコさんがゆつとったやろ？　『この世に偶然はない、あるのは必然だけ』ってな」

「あ、それ！　私もその漫画好きです！」

「そうか？　おおきに。可愛いお嬢ちゃんやなあ」

なんだコイツ、意外にも少女マンガ好きか。

そして大坂井、こんなヤツと喋るな。

「さっきの珪素生命体と呼んだのもキミやな。罪な男やなあ、マモルちゃん」

望月という名の研究員は、トンボを捕まえる時のようにくるくるとスプーンを回して、オレにぴっとつきつけた。

「あの子ら……ウサギと子供。ここんとこ京都市内を賑わしとる強

盗の正体や。強盗やゆうんに、それもこんな真昼間に何で街のど真ん中に来たと思う？」

楽しそうに微笑^{ワラ}う、研究員。

「キミがおったからやで、マモルちゃん」

クラスメイトの視線が、オレに刺さっている。

――ヤメロ。

オレの日常に、踏み込むな。

「ボクの行きつけの舗^{ミセ}に、マモルちゃんたちが来たのもまた必然^{ヒツゼン}…
…なあ、そうやろ、ケモノくん？」

スプーンを向ける先を変えて、夙夜につきつけた望月。

向こうのテーブルが一瞬だけすっと静かになる。もつとも、『ケモノ』が夙夜を指していると分かったのは、本人と白根だけだろうが。

ヤメロ。

「んー、俺はケーキさんがここで待ってるって知ってたからねえ」
ああ、そう言えばさっきコイツは望月に関して何かしら言おうとしてたな…今の今まで忘れていたが。

そして、白根は眉一つ動かさず淡々と望月に告げた。

「貴方はどうしても私の命題の邪魔をしたいのですか。先ほどの柊護さんの助言を応用し、この場で貴方には話しかける必要がないと判断したのですが、それは間違いだったと言わざるを得ないようです」

「うわあ、葵。まさかキミがそない長い文章を話すとは思わなかったわ」

「命題の証明が私の目的です。何人たりとも邪魔は許しません」

ヤメロ、

ヤメロ。

オレの日常を破壊するな。

「柊くん、白根さんは何を言ってるの？ 命題って？ 珪素生命体^{シリカ}を呼んだって、どういう事？」

大坂井の声のトーンがほんの少しだけ下がる。

ヤメロ。

ヤメロ。

――オレヲ壊スナ

気づけばオレは、テーブルを拳で叩きつけていた。

耳に残る音の残滓と、拳に残る痛みがじわりと滲みだしてくる。

「マモルさん、突然そんなことしたら、みんなびっくりしちゃうよ」
「……あ、ああ、すまない」

夙夜ののんびりした声で、オレははっとする。

「ボク、えらい嫌われてもうたなあ」

かちやかちやと最後まで残していた一掬いをスプーンで口に運び、望月は笑った。

「まあ、ボクに命題が与えられるのも時間の問題なんやから、これからよろしゅうって事になるんやけど……」

がたり、と席を立つ望月。手にはひらひらと勘定を3枚、ひらひらとさせている。

「お詫びにここは奢ったるさかい、堪忍な」

オレたちのテーブルの分の勘定をすべて一括、カードで済ませた望月は、店ののれんを押しながら肩越しに振り返って、その漆黒の瞳でオレを射抜いた。

「またな、マモルちゃん」

再びオレをその場に釘付けにして。

静まり返った店内で最初に沈黙を破ったのは矢島だった。

「な、なんだ今の無礼な輩は。知り合いなのか？ 白根」

「知りあい……以前に遭遇した事があるかと聞かれれば、肯定せざるをえません」

勘定を見せない白根にしては珍しく不機嫌なトーンで答えた。

「俺とマモルさんも、昨日伏見稻荷で会ったよ」

「その割に、柊の事を気に入ってたように見えただけど？」

相澤の言葉で、オレは思わず吐き捨てるように言っていた。

「知るか……アイツが勝手にオレを構いたがるだけだ」

そう言うのと、大坂井はくすくすと笑った。

「柊くん、本当に嫌ってるみたいだね。そんな悪い人には見えなかったけど？」

「この勘定もすべて払ってくれたようだしな」

「それに、美形だったじゃん」

「アイちゃん面食い」

相澤と大坂井が顔を見合せて笑う。

ようやく場の雰囲気緩和された。

そこへ、ようやく注文したあんみつが運ばれてきた。

相澤は店内を騒がせた事を店員に詫び、全員の前に注文の品がならんだところで、みな一斉にスプーンを動かし始めた。

「おいしいね、柊くん」

「あ、ああ、そうだな……」

大坂井の無邪気な笑顔には笑い返せなかったが。

オレは、ただ怖かったんだ。

自分だけが普通で、それなのに周囲では普通じゃない事件が起きて、そしてオレがどんどん巻き込まれて。

夙夜や先輩は、白根は当たり前のように生活しているその事件の渦中に何のとりえもない、参加証を持たないオレが一人だけ間違っ

て参加している事をいつか誰かに見破られるのが怖くて。

オレは日常を壊されなくなかった。

今までのように、大人しく暮らしていきたい。

知りたい。もっと知りたい。

オレが属していない、白根や夙夜がいる世界を知りたい。
何もかもを知りたい。

こうして道化師は、坂を転がり落ちていく。

マイナスの加速度を全身に感じながら。

そして、道化師は世界を閉じる。

11 .. 道化師の自我と獣の意思と

オレには二つの願望があった。
相反する二つの願望。

——日常の破壊を嫌悪する心
——日常を捨てるようにする心

どちらもオレで、どちらもオレじゃなかった。
オレが選択したわけじゃない。
でも、気がつけば世界は動き始めていた。

人間の欲は尽きない、だから、オレは、どうしても——

「到着だーっ！」

雄たけびでもあげそうな勢いで拳を天に突き上げ矢島が叫んだ。
現在時刻、午後2時……：……ようやくオレたちは当初の目的である白
峯神社へと到着した。途中で昼食をとったとはいえ、宿を出発して
からなんと4時間。

なぜ5キロしかない道のりに4時間もかけたんだよこんちくしよ
う。全部アイツのせいだ——白根の組織の研究員だとか言う、望月
桂樹！ 珪素生命体シリカのウサギも、甘味処でガラにもなくオレがキレ
たのも、全部アイツのせいだ！ バカ野郎！

とまあ、珍しくオレは夙夜以外の人間に対してイライラしていた。
「マモルさーん、ずっと眉間にしわ寄ってるよ？」

「離れて歩きながらオレを観察してんじゃねーよ、このマイペース

野郎」

「ほら、そんな大声出したら大坂井さんが怖がるよ？」

「私は大丈夫だよ。柊くん、面白いし」

「マモルさんは面白いって、大坂井さんが言ってるよ」

「……この距離ならさすがに聞こえる、黙れ夙夜」

「うわあ、マモルさんが冷たいよー」

そう思うなら、そのへらへらした笑顔をやめろ。

大きいわけでもなければ小ぢんまりしたわけでもない。街の中にある、本当にどこにでもありそうな神社の鳥居をくぐり、念のため一礼して足を踏み入れる。

伏見稲荷の時に感じたような圧力はなかったが、ほんの少しだけ、街の喧騒から遠ざかった気がした。

きつと夙夜の言った事はウソじゃない。鳥居の内側は、神様の住む場所なんだろう。

とまあ、全く似合わないようなコトまで納得したころ、ようやくオレは落ち着いてきた。

あの望月とかいう研究員がいるだけで、どうもオレは熱くなりすぎらしい。

「落ち着いた？ マモルさん」

「ああ、もう大丈夫だ」

いつもこのマイペース野郎がオレの事をお見通しつてのが少々腹立たしい気はするのだが。

気合いを入れてお参りをしている矢島と相澤、それにつきあう大坂井、相変わらず鉄壁の無表情美人に挑む黒田と土方。

初夏のさわやかな風が、オレたちを取り巻いて吹き抜けていく。

「やっと話せるね」

夙夜がにこりと笑った。

そうだ、朝からずっと人と一緒にいたせいで、ほとんどコイツと話せていなかった。

「白根は……ま、まだ無理か」

黒田と土方に挟まれて、嫌悪の表情も見せないが全く楽しそうな表情も見られない白根を見て、多少あの二人を尊敬する。あの無表情に半日も食いつくなんて、オレには無理だ。

「アオイさんとは、後で話そうよ。無理しなくても、近くに珪素生命体^{シリカ}はいないから、たぶんなにも起こらないよ」

「……オマエ、あのウサギが近づいてたの、分かってたろ」

「うーん、でもあれは向こうから寄って来たんだよ。ケーキさんじゃないけど、何かに引き寄せられるようにこっちに近寄って来たんだ。回避できなかった。あと、みんながいたから言えなかった」

「……お前が呼ぶと、あのクソ眼鏡の名前が甘味に聞こえるから不思議だよ」

それと、コイツがオレ以外にはきちんとその並はずれた能力を隠しているのが不思議だ。

「それからさ、大坂井さんはいろいろ言ってたみたいだけど、俺はマモルさんがシリウスを非難するんじゃないかって論したのは、すごくよかったと思うよ」

「……ああ、そうか」

「あと、ケーキさんの事だけど、ごめんね。マモルさんがあんまり会いたくないって知ってたから言おうかなーと思ったんだけど、あんまりうまく言えなくて」

一つ一つ思い出すように。

夙夜は順に連ねていった。

「それからさ、昨日、宿に侵入した珪素生命体^{シリカ}は、一人じゃないよ」
「……?!」

相変わらずへらへらと笑う夙夜は、淡々と言った。

「ええとね、マモルさんと俺の荷物をめちゃくちゃにしたのは、もう一人の方。でも、みんなの携帯端末を持って行ったのはさっきのウサギさん」

どういうことだ？

夙夜はいったい、何を言っている？

が、ここでもう一度思い返す。

大坂井は、昨日の夜に珪素生命体シリカを見たと言っていた。

しかし、先ほどウサギ少年を見た時、昨日見た、とも何とも云わなかった。むしろ、『犯人の半分』といった夙夜シリカの台詞に驚いてはなかったか？ それはもしかして、昨日見た珪素生命体シリカと別人だったからじゃないのか？

そして『半分』と言った夙夜は、ウサギ少年と共にいた子供が残りの半分だなんて一度も言っていない。

それより何より、あのウサギ少年は、足と耳こそあれ、それ以外は全く動物の体を保持していなかった。ツメも牙も持たないウサギが、あんなに部屋を傷つける事は不可能だ。

一つずつ、いろんな形のピースが繋がっていく。

真実を指し示すように。

じゃあ、誰だ？

オレたちの部屋を引っかきまわしたのは――

「……望月桂樹もちづき けいじと一緒にいた、あの珪素生命体シリカか……？」

ふと呟いて夙夜を見ると、にこりと笑った。

やっぱりそうだ。

ここまでわかったならば、真実を指し示すシーソーに乗せるべきモノはただ一つ。

「あと、何が分かったらマモルさんは全部解ける――？」

無邪気に言った夙夜の台詞に、オレは一瞬どきりとした。

オレは、またこの事件を解こうとしている。

日常を壊したくないと言いながら、また非日常に自ら首を突っ込んでいる。

「マモルさんのためなら、俺、頑張ってもいいよ」

「だから何だ、そのホモくさい台詞は」

「だって、ただ事件を見過ぎて待ってるなんて、マモルさんらしくないしさあ」

オレらしくない。

オレは何者——オレは——非日常が——日常は——壊スナ——破壊——事件——災厄。

何者か、と聞かれて凍りついたのは、まだオレに自覚がなかったせいだ。

らしくねえ。

「そうだ……そうだな」

オレらしくねえ。

なんて、分かりやすい理由。

ビークール、『口先道化師』。

「いいだろう」

事件の方がオレを放っておかないなら、オレは正面からそれを迎え撃って、一刀の元に斬り捨ててやる。

夙夜のような能力はなく、白根のように組織チカラもなく。

一介の口先道化師が使えるのは、ただ言葉を操るだけで。

「じゃあ手伝えよ、夙夜」

「うん、いいよ」

いつもと変わらない笑顔。

あの時と、萩原の死を明かそうと決めた時、承諾して見せた笑顔。

「さんきゅ」

オレも笑顔を返す。

ああ、笑ったのはいつ以来だろうか。

さあ、ここからが本番だ。

なんて言葉ならオレたちに似合う？

さしずめ、『事件』ってより『災厄』ってどこか。

オレはあっちのヤロウに手を引かれ、最後の一步を踏み出した。

——知識欲

そんな人間の原始的な欲望にかなうはずもなかったんだ。

だから、何があっても迷うなよ？

口先道化師――

12 .. 破壊意思のオーバチュア

帰り道は、集合時刻まで間がなかったため、よそ見をせずにまっすぐ宿まで帰還した。

ただし、途中でしがない服屋に寄ってオレと夙夜の服だけ揃えた事を付け加えておく。そうしないと、明日から着る服がない。

宿には警官がいるかと思っただが、既に撤収していたようだ。そして、研修旅行もこのまま何事もないかのように続行らしい。

オレと夙夜には昨日とは違う部屋が与えられ、ごろりと転がってすでに一時間。夙夜はほとんどぴくりともせず布団の上に座り込んでいる。その姿は、まるでリラックスしながら獲物を待つ獣のよう。

修学旅行の時も思ってたんだが（あん時も同じ部屋だった）、コイツは一日に何度かこうやって一人の時間を過ごさなくては生きていけないらしい。

しかし、昨日の夙夜の言葉ではないが、このままでは風呂に入りそびれてしまう。

「風呂行くぞ、夙夜」

ぺん、と頭を叩いてやると、夙夜は顔をあげ、分かった、と答えた。

しがない旅館と似合わない広い浴場には、誰もいなかった。

隣で目を閉じたまま髪を洗っている夙夜に、意地悪で桶の湯を一杯かけようとしたけれども、アイツは耳がいいからそんな単純な攻撃は簡単に避けやがった。のでシャワーを直接かけてやると、非難の叫びを上げたので、無視して湯船へ直行した。

夏だからなのか、高校生が何人も入ったからか、少しぬるめの湯につかると、一日の疲れがどっと押し寄せてきた。

今のところ、悩みの元は大きく分けると3つ。

まず一つは組織関連。

昨日伏見稻荷で会った望月とキツネ少女の事だ。夙夜の主張が正しいならば（今までの経験上100パーセントの確率で正しいが）、オレの部屋を荒らしたのはあのキツネ少女という事になる。

いったい、何が目的だ？

望月の指示なのか？

それともあの珪素生命体シリカが単独でやった事？

望月が行きつけだと言った甘味処が京都の街のど真ん中である事を考慮すると、あのクソ眼鏡はここいら周辺に住んでいる事が予想できる。関西弁なのもこの周辺に住んでいるからだろう。

組織の研究員だと言っていたが、もしや組織の施設か何かがこの付近にあるのだろうか。あの二人に関しては、後で白根に聞いてみた方がいいかもしれない。

最も、答えてもらえるとは限らないが。

オレは、組織について何も知らないのだから。

組織、という事は国家とはまた別なのだろう。たとえば、夙夜の叔母の香城珂清かうじょうかすみさんは国家組織に属すると言うけれど、白根はどうやらそれと無関係。

オレが知る限りで他に珪素生命体シリカ関連の組織というと、民間で珪素生命体の権利を主張する、動物愛護団体関連の組織くらいだったと思うのだが……くそ、もっと社会に目を向けておくべきだった。

帰ったら毎日、新聞を読む事にしよう。

そして二つ目は警察。

とうとうオレたちを珪素生命体シリカの囹にするほどまで嗅ぎつけられた。

単純に、『遠目に見た』というならともかく、コミュニケーションをとって名前まで与えて、オレ達が遭遇した珪素生命体の数はめ

でたく5体を数えた。

オレたちの事が溝内と名乗った女警部の独断か、それとも警察全体に行きわたっていることなのか、オレには見当もつかない。が、今回、偶然とはいえ初日から珪素生命体シリカを呼び寄せてしまったオレたちは、確実にブラックリスト行きだろう。

それは確実に夙夜のせいだと思うのだが、一緒に行動して、同じだけの珪素生命体シリカと遭遇してしまったオレも同罪になっているのは避けようもない事実だ。

――罪

シリウスの殺人を隠そうとした事。その後、シリウスを消滅させたのはオレだ。

梨鈴と過ごしたこと、それから、イズミというネコ少年が梨鈴を消して――そのイズミを、夙夜が消した。

そのどれもが、オレの罪。オレたちの罪。

そうだ、夙夜が覚えているはずの警察資料についても聞いてみなくちやいけねえ。

これからオレたちがもっと珪素生命体シリカと関わっていくとしたら、必然的に関わっていく気もするが、いったいどうしたらいいのか。ちっぽけな高校生でしかないオレは、いったいこの先どうなっているのか。

ああ、そうだ、それが問題ってヤツだ。

それから三つ目、今回の盗難事件の犯人であると思われるウサギ少年と子供のこと。

最も軽い問題で、最も差し迫った問題とも言えるコレ。

残念ながら、これに関しては何にも分かつちやいねえ。

ずっと京都で盗難の罪を重ねているあのウサギがオレたちの前に姿を見せた理由も、あの子供との関係も、それから盗みを重ねる理由さえ。

分からないことだらけ。

分かっていった現状を再確認して、オレは湯船の縁に腕を持たれてため息一つ。

ぴちゃん、と湯船に雫が落ちる。

「マモルさん」

「うおっ、びっくりした！ 気配消して近寄んな！」

突然の夙夜の声に、驚いて飛び退った。

「俺、気配消すなんてできないよ。マモルさんが考え事してて気づかなかっただけだよ」

いや、オマエはケモノだからな。そのくらい普通にできそうだ。

「マモルさん、今日はたくさんあって疲れたねえ」

「そうだな」

「何から話していいか分かんないや」

「……必要があったら、そのときはオレが聞く。だから、全部覚えとけ」

「はい」

へらへら笑いやがって。

なんかイラっとしたから湯をかけてやったらかけ返された。

夙夜は水をとばすように頭をふるふる振った後、何でもないように言った。

「ねえ、マモルさん。昼に遭ったウサギさんに、もう一回会ってみる？」

「?!」

コイツはまた、唐突に唐突の輪をかけて、何を言い出すんだ?!

「さっきさ、せっかく見つけたから、近いし、会いたいかと思って聞いてみたんだけど」

見つけた？ もしかすると、さっき瞑想してるように見えたのは、珪素^{シリカ}生命体を探してたとしても言うのだろうか。

「……」

香城夙夜18歳、桜崎高校3年文学部所属。

へらへらと気の抜けるような笑顔で人当たり良く、敵は少ない。頭の超のつくマイペース人間で、周囲から天然だと思われる事も多い。

だがその実、その中身は、ヒトから大きく外れたモノだ。

『野性のケモノ』——その名称が正しいのか、オレには判断できないが。

「……行くか」

浴衣ではなく、昼間買った私服に着替えて。

教師と同級生の目を盗んで、オレたちは宿を抜け出した。

さあ一步を踏み出そう。

気づいたのならもう枷はない。

世界の終焉まで転がり落ちよう——道化師は破壊意志を持ち、ケモノは破壊意志の遂行者に変わる。伯楽は破壊を憂い、伝道師はすべてを染めていく。

災厄の始まり、すべての終わり。

すべて、はるか昔に始まっていた事だから。

13 .. 自我と名前と反抗心（前書き）

※ この物語はフィクションです。

実在の人物・団体とは関係ありません。

13 .. 自我と名前と反抗心

梅雨が近づいたこの時期、夜に寒いという事はない。

オレはシャツに長袖のジャケットを羽織っただけで、夙夜はパーカーを着て外に飛び出し、指示に従って北上していた――のだが。

「マモルさん、せっかくだからアオイさんも一緒に行こうよ」

突然夙夜がそんな事を言い出すものだから、思わず絶句してしまった。

だめだ、何度言われても、コイツの感覚にはついていけねえ。

「白根はどこだ？」

「ここでちょっと待ってればすぐ追いつくと思うよ」

近っ！ 早っ！ つか追いつくって、アイツも宿を抜け出したのかよ？！

と、夙夜の言ったとおり、10秒と待たないうちに、薄暗い通りの向こうから白根が歩いてきた。

白根ときたら、服装自由の研修旅行でも昼間は制服を着ているものだから、私服を見るのはこの時が初めてだった。

とはいえ、まるで色気のないデニムジーンズに無地の黒シャツの袖を軽く捲った状態では、制服の方がよっぽど女性らしいと言わざるを得ないが。この服じゃ今にも闇にとけそうだ……細身の白根には似合っているから文句はないのだが。

重ねて言うが、オレの好みは美人系じゃなく可愛い系なのだ。

制服よりだいぶ大人びた雰囲気を漂わせながら、相変わらず無表情の白根は自然にオレたちと並んで歩き出した。

「白根、オマエの組織からも何か指令、じゃねえ『命題』がでてるのか？」

そう問うと、白根は眉一つ動かさずさりと云った。

「今回は、組織の関与していない不測の事態です」

「そうなのか？」

少しカマかけてみようか。

「……でも、組織の施設って、京都にあるんじゃないのか？ いいのか、お膝元でこんな事件起こされてよ」

きろり、と白根のアーモンドがオレを貫く。

「組織に関する説明は、許可されていません」
ち、ダメか。

だがこの反応、おそらく京都に何かしらある事は間違いないだろう。

どうにかして白根を懐柔できたら——その考えに、オレの背筋がぞくりと粟立つ。

一介の高校生が、警察だけならいざ知らず、でかい組織に楯つこうと？

——それもまた、一興。

「あの望月ってヤツが京都の甘味処をいきつけと言った時点でアイツが京都に住んでる事は確定してんだ。あのクソ眼鏡が白衣のまま電車に乗ったってんならともかく、昨日も伏見稲荷にいた。教徒かどうかはわかんねえが、近くに住んでる事は間違いねえ」

「……」

白根の目が一瞬、非難めいた光を灯した。

どうやら、非常に珍しい事ではあるのだが、白根は望月の事をあまり良く思っていないように見受けられる。

この無表情からそれだけ読み取れるようになったオレがすごいのか、白根が少しばかりオレたちに心を開き始めたのか。

ああ、世界は変化していく。

夙夜が無関心を破壊するように、白根が無表情を破壊するように。「変わらないものなんて、この世にないんだよな……」

いつだったか漫画か小説で見た台詞をぽつりと呟いて。

再びオレは覚悟を手にする。

ピエロとケモノとロボットだなんて、オズに住む魔法使いもびっくりのちぐはぐパーティではあるが。

「で？ 夙夜、そのウサギってのはどこにいるんだ？」

「んと、あっち」

「吉田神社です」

夙夜と白根が同時に答えた。

京都ってのは神社やら寺やらばかりだな。要するにどこもかしこも神様だらけってか？

「ここは京都大学構内、5分ほどで参道に抜けます」

「京都大学構内？」

ああ、言われてみればさっき門のようなモノをくぐったようなくぐってないような。にしても全開だったから特に気にもしなかった。周囲も少し建物が多いかな、という印象の普通の道だ。とてもこれが学校とは思えないが……しかもあの有名な京都大学。

まさか、この汚い建物一つ一つが研究棟？

「なんでわざわざ大学構内なんか通ってんだ？」

「短縮経路を選択しました」

素直に近道と言え、近道と。

にしても目的地までの道のりをショートカットするとは、かなり土地勘がありそうだ。

京都大学のシンボルだというクスノキが見えてきたあたりで、白根は進路を右方向に変えた。

目の前には、大きな鳥居とその背後に黒々としたシルエットを見せる山。

「珪素生命体^{シリカ}ってやっぱ、山とか森とか好きなんだろうな」

「……そうだね」

夙夜がほんの少し躊躇ったのはなぜだろう。

この声には覚えがある。

——ごめんね。

そうだ、シリウスが犯人だと分かっていて、オレに謝った時と同じトーン。

夙夜、オマエ、今回は何を隠している？

聞き返すのを躊躇っているうちに、オレは神社の鳥居をくぐり抜けていた。

灯りなどほぼない坂を登るのは少々きつかった。舗装の悪い道で何度か躓きそうになりながらも一歩一歩進んでいく。

と、暗闇の中から子供の笑い声がした。

ウサギと一緒にいた子供か、と思ったが、昼間に見た印象よりもっと幼い声だった。

「ここね、神社の中に幼稚園があるんだ」

「神社の中に？」

「幼稚園って言っても、24時間だからね。この時間にも子供の声がするんだ」

夙夜が指さした方向に、ちらりと灯りが見える。

「昼に見たウサギさんはね、あの幼稚園にいるよ」

「……」

なんだその前フリ。嫌な予感しかしねえよ。

「一般人による隠匿だとすれば、組織の手落ちです。すぐさまリストに加えねばなりません」

「来たよ」

夙夜の言葉で戦闘態勢に入ろうとした白根の手首を掴み、爪を取り出させないよう留めた。白根のアーモンドの瞳がオレを貫いて一瞬退きそうになるが、ここは譲れない。オレたちは戦いにきたわけではないのだ。

だんだんコイツらの行動パターンが読めてきたオレってすごいと思う……普段苦勞してるんだから、自分で自分をほめるくらい赦してくれよ？

さくり、さくりと草を踏む足音がして、暗闇から着物姿の珪素^{シリカ}生命体が姿を現した。昼間のようにフードは被っておらず、長い耳が銀の髪の間から覗いていた。着物の裾からは銀色の毛並みのウサギ

の足が覗いている。

「こんばんは、珪素生命体^{シリカ}のウサギさん……ヒナくん、かな？」

夙夜はいつものようににこりと笑って手を差し出した。

ぴくりと耳が動く。

しかし、オレたちの事を警戒しているのが雰囲気^{シリカ}で伝わってきた。

「……日向^{ヒナタ}だ」

ウサギ少年の喉から洩れる声は、これまで聞いてきた珪素生命体^{シリカ}とは一線を画す、落ち着いた声だった。ただ、ほとんど表情ないが、少しばかり苛立っているように見受けられる。

しかし、愛らしい容姿と裏腹なその声にも夙夜は全くひるまなかつた。

「ヒナタくんかあ、よろしくね」

邪気のない笑顔で、ウサギ少年の警戒心がほんの少し揺らいだ。

オレは白根の手から力が抜けたのを確認し、白根の動きを封じていた手を放した。

よしよし、もう攻撃する気はなさそうだ。

「目視した以上、放置するという選択はあり得ません。組織に報告し、保護を要請します」

爪を取り出して戦闘を始める様子はなかったが、白根は代わりに携帯端末を取り出した。

「落ち着け、白根。まだ何も分かってねえんだ」

とりあえず白根をとめたオレは、夙夜とタッチ交代。

真っ赤な目をした珪素生命体^{シリカ}と向き合った。

「ハジメマシテ、と言いたいところだが……昼間、会ったな。珪素^{シリカ}生命体^{シリカ}の少年」

「日向^{ヒナタ}だ。有機生命体^{タンソ}」

珪素生命体にとって、名前っていうのはそんなに重要なのか。

昨日会ったキツネ少女は名前がないと言っていたな。今度会った時につけてやってもいいかもしれない。梨鈴もシリウスも喜んだように。

「ヒナタ、オマエ、昨日の夜にオレたちの宿から携帯端末を盗んだだろう？」

ヒナタは答えなかった。

沈黙は肯定だということは、自分が一番よく知っている。

「どんな理由があるか知らんが、返せ。みんな困ってるんだ」

「……ユウが所望した。返すわけにはいかない」

「ユウ？ 昼間のガキか？」

「答える必要はない」

なんて反抗心の強い珪素生命体だ。いや、強いのは反抗心というより自我か？

「第一、お主は何者だ」

「オレか？ オレはマモル。柊護だ」

「マモル……違う。我が聞きたいのは、何故、我を呼んだかという事だ」

「呼んだ？ オレが？」

「そうだ。我が有機生命体の中心にすき好んで行くはずがなからう」
「どういう事だ？ コイツはいつたい、何を言っている？」

オレが呼んだ？

夙夜が軽く目を細めた。

「珪素生命体はね、残滓に惹かれるんだよ。俺たちに残った珪素生命体の気配が呼んだのかもしれない。それに、アオイさんの水晶の爪もあった」

珪素生命体の残滓。水晶の爪。

3体分の残滓。

「マモルさんと俺には3人分、アオイさんはよく知らないけど少なくとも1人分と水晶の爪があるからね。きっと珪素生命体にとっては磁石みたいなものなんじゃないかなあ？」

おいおいおい。

要するに、ここで3人揃ってるこの状態がすでに最悪って事か？
「夙夜……まさか、昨日のキツネがこっちに向かってるって事はな

いだろうな?!」

「それは大丈夫。あ、でも気になるなら、近づいた時に言うけど」

「来てないならいい」

「でも代わりに」

代わりに、ってもうどれだけ伏線はったら気が済むんだ?!

「何が来るってんだ」

「何って言うか……あの幼稚園からヒトが来るよ」

「ああ、なんだ、ヒトか」

って、人間がくるからってほっとするなんて、どれだけ珪素生命^{シリ}体を恐れているんだ、オレは。

ん? ヒトがくる?

「ってヤベエじゃねえか!」

こんな所にいるのを見られたらまずいだろう?!

研修旅行の宿抜け出して、高校生の男女3人がこんな薄暗い神社に、しかも目の前に珪素生命体^{シリカ}……って、突っ込みどころしかねえ! すぐ逃げないと……!

「ヒナタ、そこにおるんか?」

男性の声がして、ぴくんとウサギ少年の耳が立つ。

逃げなくては——と思ったが遅く、暗闇からずっと青年が現れた。

「誰やっ?!」

鋭い声に、オレたちはその場に釘付けになってしまった。

14 .. ケモノの覚醒と幼稚園

「何者や?!」

ちつくしょ、逃げ損ねた!

丸い光の輪が当てられる。眩しさに目を閉じた瞬間、さっと横を何かが通り過ぎた感覚があり、凄まじい金属音が響き渡った。

今のは白根の爪の音……!

と、思った瞬間、今度は近くで鈍い音がした。

恐る恐る目を開けると、夙夜が地面に転がっている。その横には、懐中電灯がころころと転がっていた。

「夙夜っ?!」

「いててて……」

頭を押さえながら立ち上がり、何かを避けるようにひょいっと飛び上がる。

見れば、先ほど暗闇から現れた男が夙夜に向かって長い棒を振り下ろしていた。鈍い音がして地面が決れる。

「――?!」

驚いて振り返れば、白根がウサギ少年『ヒナタ』と戦鬨を繰り広げていた。

ああ、もう、どういうことだ?!

「マモルさん、下がって!」

これは、どう考えてもオレたちが襲われているとみていいだろう。夙夜に棒を向けるのは、派手な金髪の青年。まるで大阪のおばちゃんを着てそうな虎の顔がでかかどプリントされたゆるいTシャツにダメージジーンズ、黒のバッシュとおそろいのメーカーのリストバンド。歳はオレたちより少し上くらい。

地面に叩きつけた棒がぼきりと音を立てて折れ、腰のチェーンを外してさらに夙夜に向けた。

夙夜は運動神経が悪くない。むしろいい方だ。しかし、格闘をや

っているわけでも日常的に喧嘩しているわけでもない。

それに対して、相手はとてつもなく喧嘩慣れしているように見え
た。

流れるような動きで折れた半分の棒を拾い上げ、素早く撓らせて

夙夜の腕を打った。

「夙夜！」

思わず身体が動いていた。

折れて地面に落ちた残り半分の棒を拾い上げ、金髪の青年に向か
って投げつける。

それを何なく避けた青年がオレの方に狙いを変えた。

「あんたら、何者や！」
ナニモン

きつい関西弁と共に凄まじい速度の拳が飛んできて、思わず跳び
退った。

オレと交替で夙夜が金髪青年を見て何かを見定めるように逡巡し、
さっと地面を蹴った。

と、思った瞬間、後頭部に衝撃。

「マモルさん！」

夙夜の声が遠ざかり、背後で金属音がした。
意識が遠ざかる。

ヤバい、と思う暇もなく、オレは昏倒してその場に転がった。

真っ暗な視界に光が差した。

「起きたでー！ あんちゃん、起きた！」

耳元に響き渡るキンキン声。

思わず顔をしかめたが、状況を確認するためすぐに目を開けた。

「よー、白根。元気そうだな」

ああよかった、最初に見たのがマイペース野郎の気の抜ける顔だ
ったら、もういっぺん眠ってやろうと思っていたところだ。

すっきりとしたアーモンドの瞳でオレを見下ろしていた白根は相

変わらず無表情だったが、その日常になぜか少しほっとした。

どうやら床に寝かされていたらしい、天井の木目は古くかけられていた布団もふわふわと言い難い固い綿が詰められた質素なものだった。起き上がろうとすると、後頭部がうずいた。

「……痛う」

頭を押さえながら上体を起こしたオレに、白根は淡々と告げる。

「おそらく貴方が欲するであろう状況の陳述を行います。ヒナタという識別称を持つ先ほどの珪素生命体^{シリカ}が、柊護さん、貴方の後頭部を思いきり蹴り飛ばしました。そこで貴方は昏倒し、その後、10秒以内にケモノがすべてを一掃、現在に至ります」

オレの後頭部が珪素生命体^{シリカ}の踏み台になったことやら、夙夜が10秒以内にあの場を収めた事やら、様々突っ込みたい点はあったのだが、重要な事は他にあった。

「白根、オレの質問に簡潔に答えろ」

「はい」

「現在時刻は？」

「午後11時37分25秒です」

と、いうことは昏倒してからさほど時間はたっていないな。

「ここはどこだ？」

「吉田幼稚園内、遊戯室の一角です」

吉田幼稚園？　って、さっき言ってた神社の中の幼稚園か？

じゃあ、起きた時に聞いた声の主は、幼稚園の園児ってところか。

「ヒナタ……珪素生命体^{シリカ}はどうした？」

「香城夙夜さんが取り押さえた後、現在、屋外で待機状態です」

「もう一人の、夙夜を殴ったアイツは？」

「不明です。左肩の脱臼と全身の裂傷から、屋内での治療中と予測できます」

「左肩脱臼と全身の裂傷？　それ、夙夜がやったのか？」

「はい」

白根は淡々と答えた。

夙夜が相手に怪我をさせた？ それと同時に珪素生命体シリカを捕えた？
それも、ほんの数秒以内に？

「夙夜はどこだ」

「ここにいるよ、マメルさん」

はっと声のする方向を見ると、夙夜がいつものへらへらした笑みで壁際に座り込んでいた。

「オマエは無事なのか？ あの金髪のヤツは怪我したって聞いたが」
「俺は平気だよ。大丈夫」

大丈夫、と言っているが、少し破れたパーカーの袖から、包帯を巻いた腕が多少見え隠れしていた——コイツ、自分の目がいいからって、オレの視力を過小評価しているだろう。

が、いくらか借りもあるのでここは流してやる事にしよう。

先ほど白根はここを『遊戯室』と言ったが、確かにその通り、オレの周囲にはカラフルなおもちゃがごろごろと転がっていた。

さて、頭痛はまだあるが、そろそろ宿に向かわない事には、部屋はオレと夙夜だけだからバレないとしても、クラスメイトが遊びにきて露呈しないとも限らないのだ。

思い切って起き上がろうとしたところで、部屋の外でどたどたと足音がして、引き戸がぱんつと開かれた。

「にいちちゃん起きたで！」

子供のキンキン声が最初に、その後から落ち着いた女性の声が追いかけてきた。

「気分はどう？ お水、持ってきたから、どうぞ」

お盆にペットボトルとコップをのせて。オレの保育士像をそのまま具現化したかのような女性がにっこりと笑いながらこちらに向かってきた。

さすが保育士さん、子供をちゃんと部屋から追い出すのも忘れなかった。

パーマをかけた茶色の髪をアップにして、化粧はしているかどうか分からないほどのナチュラルメイク、それでもももとの目鼻

立ちが整っているから気にならない。さらにロングスカートとパス
テルカラーのシンプルなエプロン。この優しい微笑みとい……
もう、狙っているとは思えない。

手渡されたコップの水を口に含むと、後頭部の痛みさえ引く気が
する。

「申し訳ない、うちの乱暴者が。どうやら、警察関係の人だと勘違
いしたらしいんやけど」

警察関係の人と勘違いして襲いかかってくるって……それはそれ
でまずいんじゃない。

「彼、何者ですか？」

「んー、どない言うたら……近所の子？」

「いや、子っていう年じゃないですよね。确实、オレらより年上だ
し、無駄に喧嘩慣れしてるし……」

と、そこまで言うてから、怪我が酷いのは向こうの方だと気づい
た。

はた、と我に返り、深々と頭を下げる。

「こちらこそ、うちの夙夜が失礼しました。彼の怪我、大丈夫でし
たか？」

「お気になさらず。いつもの事やから。それより、貴方も乱暴者を
抱えて苦労してはるなあ」

ころころと笑う保育士さんは、ぽん、とオレの肩を叩いた。

うーん、こっちは乱暴者と言うか天然と言うかマイペースと言う
か頭が固いというか、微妙な感じなんだが。

苦労しているに変わりはない。

「あの子、光喜コウキもね、喧嘩ばかり。怪我ばかりしよって」
コウキって、あの金髪ヤロウか。

じゃあ、ウサギ少年ヒナタのいう『ユウ』とやらは、昼間会った
あのがきんちよで間違いないだろう。

まだ、見えない。

全体の関係が見えてこない。

「困りもんや」

保育士さんは物憂げな笑みを見せた。

この人は、きっと全部知っている。

「……すみません、あの、えーと……保育士さん？」

「あら、うち、名乗ってなかった？ 早瀬^{はやせ}ナユタ。夜勤の保育士、

26歳独身」

いくつかいらん情報が。

「早瀬さん。いくつか質問してもいいですか？」

「ええよ」

この微笑みの裏で、日向^{ヒナタ}が何をしているか知っている。

「夙夜や白根から聞いたかもしれませんが、オレたち、研修旅行で東京から来たんです」

「ああ、通りで言葉遣いがしっかりしてはるわ」

「それはいいんですが、昨日の晩、オレたちの宿で盗難があったんです。携帯端末ごっそり、それとサイフが少々」

早瀬さんの笑顔が凍った。

やはり、この人は知っていた。

「非難しにきたわけじゃありません。警察に突き出す気もない。でも」

まっすぐに、早瀬さんに向かって。

言葉の魔法をかけよう。

「返してください。みんな、困ってるんです」

15 .. 言葉の魔法と口先道化師

沈黙が部屋に降りた。

もしこの目の前の保育士、早瀬^{はやせ}さんが見た目通りの人で、もしオレが邪推したように盗難の事を知っていたとしたら、この言葉には耐えられないはずだ。

「……まさか、そのためにここへ？」

「まあ、そういう感じです」

「さっき夙夜くんは警察と関係ない、言わはった。すると、たった3人でここを突き止めて……？」

「確かにオレは警察が嫌いです。でも、警察の方はそうじゃない。だから流れてくる情報もあるし、何よりこっちには夙夜がいる。夙夜は……まあ、情報収集機みたいなものですから」

「そうなんや」

視線をおとし、大きく息を吐いた早瀬さんは、それでもすぐに顔を上げた。

その表情には、決意があった。

「申し訳ないんやけど、それはうちにはできひん」

まあ、予想していた答えが返ってきた。

夙夜がウサギ少年を見つけ、幼稚園で暮らしていると分かった瞬間からなんとなく予測していたことだった。

しかし、このままはいそうですかと帰れるわけもない。

「理由をお聞かせいただけますか」

「……」

押し黙る早瀬さん。

しかたない、もうひと押し。

「もちろん、さっき言ったようにオレたちは警察にどうこうしようとか、そんなんじゃない。ただ、明日には京都を発つ身なんで、その前に返してほしいだけです。この場でオレたちに渡すのが嫌なら、

宿の大広間にでも全部放り込んでおいてくれたらいい。どうして盗ったのか、なんて聞く気ありません。もちろん、これから窃盗をやめろなんて説教していわけじゃない」

動機についてはいくつか仮説があるのだけれど、それはまた別問題。

窃盗なんてやめとけと言うのも簡単だが、この状況では無意味だろう。

「いずれにせよ、昼に京都御苑で警察に見つかったのはほとんどオレたちのせいみたいなものなんで……借りって言うとおかしいですけど、今回の事はオレたちだけの胸に秘めて東京に帰りますから」ほんの少し、隠し事が増えるだけだ。

すでに幾つもの秘め事を抱えたオレにとって、それは瑣末な事だった。

夙夜はきつと、喋らない。白根が話す事もないだろう——もしかすると、警察ではなく組織の方がヒナタを狙ってくるかもしれないが。

と、その可能性に思いついて、はっとする

「白根、まさか組織に連絡したりは——」

「私からは未連絡です」

「他のルートでヒナタの所在がバレる可能性は？」

「昼間の騒ぎがあった後ですから、組織が『ヒナタ』という個体識別称を持つ珪素生命体シリカの捕獲に乗り出すのは時間の問題と思われるます。最も、それは組織に限らず警察にも言える事です。今回、柊護さんが短時間でこの場コンプライにたどり着くという結果が得られたのは、貴方が非常に強い適合者コンプライであった事とケモノの能力との重ね合わせによる、偶然の産物です」

思ったより長い台詞で応答した白根に、オレはさらに質問する。

「もし組織がヒナタを拘束した場合、盗難に遭った物品ってのはどうなるんだ？」

「珪素生命体シリカを捕獲した時点で、ソレは組織所属の物品となります」

「それじゃオレたちの手元に返ってこねえだろうが。白根、取り返すまで絶対に組織と連絡をとるな」

「……」

一瞬、白根は迷ったようだった。

が、優先すべき第一命題が『ケモノの監視』だという事に至ったのか、そのまま口を閉ざした。

沈黙は承諾。^{イエス}

オレはもう一度早瀬さんに向き直った。

「少し話はずれましたが、オレの言い分は変わりません。誰の指示で何のために盗ったのか、今どこにあるのか、所有権は誰にあるのか、そんな事は問いません」

2度目の、呪文。

「返してください」

沈黙が流れる。

目を逸らさない。

その沈黙を破ったのは、扉が蹴破られる凄まじい破壊音だった。

「ナユタあ！」

扉を踏みつけにしながら飛び込んできたのは、先ほどの金髪ヤロウだった。腕も足も、額にまで包帯が巻かれていて、左腕は吊っている。傷の深さは分からないが、かなりの範囲に怪我を負ったらしい。

その後ろから、まるで亡霊のように音も立てない珪素生命体^{シリカ}がついてきた。白い肌と銀色の髪、真紅の目は全く生命感がない、創りモノのようなウサギ少年。

「うっ、あんた……」

先ほど、光喜^{コウキ}と呼ばれていた金髪ヤロウは、夙夜の姿を目にして一瞬ためらったようだ。

そりゃそうだ、つい先ほどこれだけの怪我を負わされて、ソイツを目の前にすればひくのも当たり前だ。が、怪我のせいでうまく動けなかったらしい。踏みつけた扉の上でよろけた挙句、壁に背中を

ぶつけて止まった。

「光喜、扉は後で直しといてや」

早瀬さんは、金髪やロウに向かってにっこりと笑う——それは、笑顔と言うにはほど遠い、ものすごく恐ろしい笑みだった。

あれ、早瀬さん、オレの印象とは全く別人ですか？ まさか、そっち系のキャラですか？

「申し訳ないけど、交渉は直接、光喜にしてくれへん？」

「な、なんやねん、コイツら！」

壁際に寄って、夙夜と早瀬さんに脅えながら、それでも、金髪やロウは眼の光を失わず、真っ直ぐにオレを睨みつけた。目つき悪い。しかも、額に巻いた包帯には新しい血が滲んでいる。

「オマエに名乗る名はねえー……なんて、古風にいききたいとこだが、一応名乗っとくよ」

ひょいと肩を竦めて、オレは順に名を列举した。

「オレは柊護^{ひこあき}、こっちが香城夙夜^{かうじょくや}、こっちの無表情が白根葵^{しろねあおい}。ちよつとばかり珪素生命体^{シリカ}に詳しいだけの、研修旅行中の高校生」

「光喜、お客様に挨拶しい」

「客って、ナユタ……っ」

「挨拶」

にっこり。

やべえ、早瀬さん、意外と怖い。

「かつ、風峰光喜^{かざみね こうき}、デス」

「よく出来ました」

にっこりと笑って、早瀬さんは立ち上がった。

「うち一人だけ逃げるみたいになるけど、堪忍してな」

優しい関西弁と柔らかい笑顔は、やっぱりオレの保育士さんのイメージそのものだった——多少、何かが見え隠れして怖かったけれど。

「3人とも宿に戻らなるといけんのなら、あんま遅くならんよう気をつけてな」

「……」

苦々しい顔で俯いた金髪ヤロウは、再びオレを睨みつけた。

あー、最悪。

でもいい選択だ。夙夜はアレだし、白根も女子高生にあり得ない異常な強さだし、オレが一番喧嘩弱いからな。

あ、自分で言っていて悲しい。オレって、3人の中で一番戦闘力ないんだ……。

金髪ヤロウの鋭い視線を受けながら、孤独な悲哀を味わっていた。

沈黙。

壁に寄り掛かる夙夜、その前にオレがあぐらで白根が正座。

向かいあうのは、ウサギの珪素生命体シリカと風峰光喜かざみね こうきとかいう金髪ヤロウ。いったい何から始めたらいいのか、多人数のお見合いじゃあるまいし。

このメンバーじゃあ、オレが一番に口を開くしかない。

ものすごく話しかけたくないが、そうしないと先に進めないのだからしぶしぶ金髪ヤロウに声をかける。

「えーと、風峰、だったか？」

「……」

返答なし。

間違っていたら確実に言い返すだろうから、おそらく正解。

「単刀直入に言う。昨日の夜にヒナタが盗った携帯端末とサイフとその他もろもろ全部返しやがれ」

その瞬間、金髪ヤロウの手がオレの胸倉を掴んでいた。

カラコンでも入れているのか、日本人らしからぬ灰色の瞳が至近距離からオレを貫いている。すっきりと切れ長の目はますます吊り上がって凶悪なツラになってしまっている。

「貴様……何処でそれを……！」

「顔が近えよ、風峰サン。カザミネホモは夙夜一人で十分だ」

「俺ホモじゃないよ」

冷静な突っ込みはいらん。後ろで黙っとけ、夙夜。

喧嘩では勝てないだろうが、口八丁ならこんな金髪ヤロウに負けねえ。

「誰がヒナタに命令して、何を目的にして持ってたのかは知らねえし、興味がないから知るつもりもねえ。まあだいたい予想はつくが……でも、オレたちが盗られたもんは取り返すぜ？」

「お前ら、やっぱ警察」

「違う」

風峰の台詞が最後まで到達する前に、ぱっさりと分断する。

「オレは警察が嫌いだ。それに、強いて言うならばその白根は別組織だしな」

「何やて……?!」

「犯罪を隠してるって点なら、オマエたちと同類だよ」

こういうタイプは、親近感をわかせてやるのがもっとも近道。

拳の何発かくらいは覚悟していたが、夙夜のせいで先ほど左肩を脱臼したのでそれほど警戒せずともいいだろう。

オレの台詞で、風峰はオレの胸倉を掴んでいた手を放した。

凶悪なツラが少々遠ざかる。

放された反動で布団の上に尻もちをついたが、それでも視線はヤツから外さなかった。

「は、なんや、軟弱なツラしよって、同じ穴のムジナっちゅーことかい」

軟弱なツラは余計だ。

「せやな、考えてみれば警察にチクるきなら、ここへ来た時点で通報しとるわな。当たり前や」

「オマエこそ、初対面でいきなり棒振り回してきやがって、相手が夙夜じゃなかったら傷害事件モノだぜ？」

「単純に脅かしてヒナタの事を誤魔化したら口止めして返すつもりやったさかい、酷い怪我させるつもりはなかったんや」

「夙夜は腕、怪我したぜ？」

「……それ、わいの包帯をちゃんと見てから言っ^ユとんのか？」

ああ、そうだったな。どう見ても夙夜の方がやりすぎだ。あとで釘を刺しておくから許せ、風峰。

と、まるで亡霊のようにその場に佇んでいた真紅の瞳のヒナタが横から口を挟む。

「コウキを怪我させた分を我が返してもよいが？」

「いらんわ」

ちくしょ、忘れていた後頭部の痛みが戻ってきやがった。

このままじゃ話がずれる。

「まあ、とにかくだ」

はあ、と一つため息をついて、オレは話を本筋に戻す。

「オレたちは、事情を聞くつもりもねえし、警察に言うつもりもさらさねえ。ただ、明日には東京に帰るんで、その前に返せ」

16 .. 無關心の崩壊とケモノのカケラ

風峰^{カザミネ}は動揺しているようだった。

まあ、そうだろう。

珪素^{シリカ}生命体を使って犯罪なんて、そうそうバレないだろう。有機^タ生命体^シを捕える事を目的とするセキュリティには一切引っかからねえし、戸籍もなければ目撃されない限りこんな人間が大量に住む場所にいるなんて思いつきもしない筈だ。

こちらが動機を聞かない代わりに、どうやってここを突き止めたのかも聞かないで欲しいのだが。

金髪ヤロウは、オレの事をじっくりと睨みつけた後、ため息をつくように言った。

「実は、わいらが捕まるのも時間の問題やから、別に返したってまええねん」

「へえ、置かれた立場は分かってるんだな。喧嘩っ早いヤツは頭、弱そうなのにな。意外だ」

「……あんた、口悪いって言われた事あるやろ？」

じっとりとした目で見上げてくる風峰に、オレは思わず唇の端をあげていた。

ああ、久しぶりだ、天然以外の相手をするのは。この会話の感覚が懐かしい！

オレが天然以外との会話に悦びを感じているとは露知らず、風峰は唇を尖らせた。

「何、笑^{ワロ}てんねん」

「いや、これは……」

慌てて表情を引き締めて、真面目な顔を作る。

が、それが余計に風峰の癪に障ったらしい。

「何やねん！ 言いたい事あるんやったらはっきりしいや！」

再び胸倉をつかまれ、今度は腰が浮いた。吊っていた三角巾を振

り払い、左拳を後ろに振り上げている。

あ、殴られる――

その瞬間、背後に気配を感じる。

オレの顔の横から腕が伸びてきて、そのまま風峰の額を指でとんとついた。

「マモルさんに怪我させたら、俺、また怒っちゃうかも」

夙夜……？

聞いた事のない声――いや、いつも聞いている夙夜の声。

低い？ 高い？ ――いや、いつもと同じ。

だが、しかし、オレの背後にいるのは、いったい誰だ？

間近に在った風峰の顔色が変わった。絶対的な力を持つ者に対する恐怖の表情だ。風峰の背後にいたヒナタが、一瞬だけ臨戦態勢に入っただのを、オレは見逃さなかった。

風峰は掴んでいた手をぱつと放し、その反動でオレはまた床に戻された。痛え。^{イテ}

慌てて振り返ったオレの目に映ったのは、ただ、いつものへらへらとした笑顔だった。邪気なく、楽しそうに、何の意味もなく笑っている。

「夙夜……？」

「なあに、マモルさん」

いつもの夙夜だった。

今の一瞬は、気のせいかな？

「あ、あんたいったい、何者や？！^{ナニモン}」

「んー、それがね、俺にも分かんないんだよ。ね、マモルさん」

ああ、そうだったな。その問答は、昨日伏見稲荷で終了したばかりだ。

何者か。

そんな問いに対する答えはあいにくと持ち合わせていない。

「そうだな、オレにも夙夜が何者かなんてわかんねーよ」

「オレも夙夜も白根も、ただの高校生さ」

タダノコウコウセイ

そんな風に言いつつも、オレは自分自身で疑っていた。

夙夜。オマエは、もしかして、本当に、『ケモノ』なのか？

道化師が無関心を破壊する。

もしその命題が真であるとしたら、オレはいいたい――

ナニモノダ

「まあ、ええわ」

脱臼したてだというのに、さすがに今のは痛かったのだろう、風峰は左腕を三角巾で吊り直して、再び壁際まで退いた。壁に貼りつく、というよりはほとんどたれかかるようにして。

肩にも届かない身長ヒナタをぐりぐりと撫でた。

「ヒナタ、すまんあ。ユウにはちゃんとわいの方から謝るさかい、許してな」

「コウキがそう決めたのなら、我は何も言わぬ。もともと、コウキがユウのために始めた事だからな」

「おーきに、ヒナタ」

風峰は肩を疎めた。

その台詞で、オレはだいたいのあらすじを知った。

だいたい予想通り、なんて偉そうなことは言わないけれど、嫌な予感でのは当たるもんだ。

財布やカードと違い、携帯端末は個人識別チップが組み込まれており、大量の売却は不可能。バラすしかないが、リスクを考えると盗む対象としては全く割に合わない。しかも紛失申請が通れば全く使えなくなってしまう。それなのに、コイツらの目的は携帯端末が中心だった。

携帯端末を盗むとしたら、理由はいくつかしかないのだが……まあ、野暮だからそこには触れないでおこう。

最も、どんな理由であれ、オレたちの盗品は返してもらおうけどな。

「もう潮時や。京の都を騒がせた神出鬼没の大泥棒も、これで終いやな」

「コウキ」

ヒナタは耳をぴんとたてて、コウキに抱きついた。

うお、かわいいぞ、あのウサギ。

「ほんまにすまんなあ、ヒナタ。あれだけ手伝^{テツド}うてもろて」

「あれは私の意志だ」

どうやら二人は、『ユウ』という人物のために窃盗を繰り返していたらしい。

そうか。だから、あの子供か。

風峰は笑いながら言った。

「ただ、少しだけ待って欲しいねん。明日の朝には宿に返しとく。あんたらの分だけやない、これまで盗ったモン全部、どっかに返すわ」

「オレが言うのもなんだが……いいのか？」

「やから言うたやろ。もう潮時やねん」

ヒナタの頭をぐりぐりと撫でて。

「交渉成立だな……帰るぞ、夙夜、白根」

オレは立ち上がり、壁に寄り掛かった風峰の横で扉のとれた入り口を通り抜ける。

風峰の隣を抜ける瞬間、オレは最後に呟いた。

「そのユウとかいうヤツの親兄弟探してんなら、もっと正攻法でやった方がいいぞ。方法なんていくらでもある」

驚いた顔をした風峰とヒナタを無視して、オレは部屋を出た。

ちょうど廊下に出たところで、早瀬さんと遭遇した。

「夜分にお邪魔しました。オレと夙夜の傷も診ていただいてありがとうございます」

ぺこりと頭を下げると、早瀬さんはにっこりと微笑んだ。

「ええんよ。それより、光喜を諭してくれはったやろ、おおきに。これであの子もヒナタ^{ツコ}使て物を盗んだりせんくなるわ」

「諭したつもりはありません。ただ、オレは盗られたモノを取り返しに來ただけですから」

「言い方次第やねえ」

早瀬さんは楽しそうに笑った。

「護くんは不思議やな。一緒に話したら元気になれそうや」

「さっきその金髪ヤロウに、口が悪いと言われたばかりですけど」

話していると元気になる？　どこの幻想だ、それは。

「それより、ユウくん、ですか。その子の親兄弟だか知りませんが、探すなら正攻法で探した方がいいですよ」

そう言うのと、早瀬さんは目を丸くした。

「……探してんのは母親や。護くんは何でもお見通しやな。ここを突き止めたことといい、光喜のことといい、ヒナタの事といい、ユウの事まで分かってしまわはるんやな」

「携帯端末ばかり盗むのは金銭目的じゃない。何が手に入るかっていうと、情報くらいのもんです……ちよつと考えれば分かります。気を付けてください、オレに分かるくらいだから、警察にもすぐ分かっていますよ」

「……おおきに、助言として受け取るわ」

早瀬さんはにこりと笑った。

「夙夜くんも葵ちゃんも、ありがとおな。またそのうち、京都にも遊びに來たらええ」

「ありがとう、早瀬さん」

夙夜はにっこり笑い、白根が会釈して。

オレたちはあっけない幕切れに背を向けた。

終わってみれば、オレなんて何の役にも立ってない、単純に夙夜

が犯人を見つけただけの事件だった。驚くほど簡単に解決してしまったこの事件は、災厄と呼ぶにはあまりにあっさりとし過ぎている。だからオレは、深夜の京都をのんびりと歩きながら、もっと別の事に気を回していた。

それは夙夜と白根の事。

オレの杞憂ならいいのだが、おそらく夙夜の無関心は崩れ始めている――その時、夙夜の、つまりはケモノの監視を命じられていた白根はどう動く？ 白根の組織はどう動く？ いつの間にかオレは白根の事をまるで味方のように扱っているが、コイツはそもそもオレたちの敵となり得るんじゃないのか……？

「柊護さん」

まるでオレの心を読んだかのように、白根がオレを呼んだ。

「昨日、本日にかけての出来事は私から組織に報告いたします。その後、どのような指示が下されるか、私には全く予測不可能です」

「オマエは夙夜をケモノとして監視してるんだったな」

「はい」

「夙夜がいつかこうなる事が分かっていたのか？」

「予想の範囲内です。鎖を付けるのが柊護さん、貴方である事も」
「……」

こう、分かっていた事だが、面と向かって『お前が原因だ』と言われると、なんだか心苦しいな。

「申し訳ありません。詳しい事を申し上げる準備が整っておりませんが、おそらく貴方にも監視が付けられるのは時間の問題と考えられます」

「はぁ？」

「わあ、マモルさん、俺とお揃いになるね！」

「……オレとしてはすげー不本意なんだが」
ため息。

やっぱりコイツは、オレを災厄に叩きこむ張本人だ。

このヤロウがオレになついたせいで、もしくは言い方を変えれば

オレがこのケモノを飼いならしてしまったせいで、オレは白根の組織に目をつけられた。

遅かれ早かれ、こうなっていたんだろうか。

「夙夜」

「なあに、マモルさん」

振り向いたのはいつもの夙夜なのに。

「オマエはそのままでもいいよ。オレは出来る限り、その、怪我しないようにするから」

「――分かったよ、マモルさん」

どこか悲しそうに微笑んで、夙夜はこくりと頷いた。

自分が何者か分からない、と言った時と同じ表情だった。

しかしながら、真夜中こっそりと部屋に戻ったオレたちは、待ち構えていた矢島たちに捕獲され、女子部屋からも白根がいなくなっていた情報と相まって、逃げられなかった。

そして朝まで尋問が続き、オレは結局眠る機会を逸してしまった。

そして、朝になって宿の大広間を覗き、昨日盗難にあったはずの携帯端末や財布が山積みになっていたのを、朦朧とした寝不足頭で確認した。

17 .. 追憶の帰路と岐路

帰りの新幹線で、オレはぐったりと窓にもたれかかっていた。
疲れた。

まさかたった2泊3日の研修旅行がこれだけ濃い日程になろうとは、予想だにしていなかった。

「ねえ、マモ」

「今から東京に着くまでの間、オレの睡眠の邪魔をしやがったら絶交するぞ夙夜」

「そんなあ」

とりあえず睡眠妨害をする原因を排除して、オレは目を閉じた。

いいから今は眠らせてくれ……ついさっきまで溝内とかいう女警部の尋問を受けていたのだ。寝不足のオレは心身ともにぼろぼろだ。盗品が残らず返ってきた事に関しては知らぬ存ぜぬを貫いたつもりだが、眠ったから、多少まずい事も口走ったかもしれない。しかし、その事については後で考える事にしよう。

それから、組織の監視の事も……夙夜の事も……あの、望月とかいうヤツの事も……。

「柊護さん、お話が」

「白根、オマエもだ。帰ったら何でも聞くから、今は黙れ」

目を閉じたまま無表情美人を撃退し。

寝心地がいいとは言えない新幹線の窓際シートで微睡みに入っていた。

今回、一気に増殖した珪素生命体関連の登場人物ってやつを、ゆつくりと整理しながら。

クソ眼鏡望月桂樹もちづき けいぎと、一緒にいるキツネ——論外。考えたくねえ。金髪ヤロウ風峰光喜かざみね こうきと、ウサギ少年日向ヒナタ——まあ、盗みもやめると言ったし、京都在住だし、もういいや。普通に生きていくだろ

う。

クラスメイトの大坂井美穂^{おおざかい みほ}——彼女があれで満足したとは思えない。今朝の視線からしても、オレのマークを外す気はないだろう。女警部の溝内さん——最終的に大坂井の手を経て押しつけられた携帯端末を使う日が来るとは思えないが、とっておいて毒にはないだろう。不快になる事はあっても。

もうこれで何人目だよ。舞台の上は人口過密、オレの頭じゃ処理しきれねえ。

誰かに御退場願いたいところだが、おそらくそれは無理な話。

救いは、京都と東京という相反する二つの地点での出来事だというその1点だけ。

夢と現の境界で、オレはこれから巻き込まれる災厄を思い、後頭部を疼かせていた。

「マモルちゃんっ！」

どすん、と腰の辺りに衝撃。

この感覚も久しぶりだ。

「お久しぶりです、先輩」

くるりと振り向いて、肩にも届かない高さで、先輩の髪がふよんふよんと揺れているのを確認する。

「少々お聞きますが、今春で卒業したはずの先輩が、なぜこの桜崎高校文学部室にいらっしゃるんですか？」

オレがもつともな質問をすると、ピンク色のエプロンドレスというえらく目立つバイトの制服に身を包んだ先輩は、嬉しそうに花束を差し出した。紅色をした小さな丸い花。

「明日は吹奏楽部の定期演奏会の日なのです。だから、ワタシは吹

奏楽部へのお花を届けに来たのです。これは、ついでに部室に飾ろうと思って持ってきたのです」

「ああ、なるほど」

先輩は花屋『アルカンシエル』のアルバイトだもんな。

「先輩、京都土産、後で店まで持って効果と思ってたけど、よかつたら持ってたってください」

「ありがとうございます」

勝手知ったる文芸部室、枝守スマイレはどこからか花瓶を出してきて、花束を水に差した。

しかし、どうやら持ってきたのは同じ花ばかりらしい。あまり派手とは言えないくすんだ赤色で、大きく広がるような花卉はなく、小さな花が密集しているだけの、指先ほどの大きさしかない花だった。

「先輩、これは……」

「あ、スマイレ先輩、こんにちはあ」

と、そこへ夙夜と白根が連なって入ってきた。

「シुकヤくん、アオイちゃん、こんにちはなのですう」

先輩は嬉しそうに笑って、花瓶をとん、と窓際に置いた。窓から入ってきた風でやんわりと花が揺れる。

夙夜はそれを見て、にこりと笑った——いつものように。

「『ワレモコウ』だね。花言葉は『変化』」

不自然なほど自然に微笑ワラっていた。

変化。

これまでと違うコト。チガこれからアタラ新しいコト。

紅の花が揺れている。

まるでこれからオレたちを巻き込む災厄を呼び込むかのように。

「柊護ひいあきるさん、香城夙夜かうじよしかさん、そして、枝守スマイレえだもりさん」

白根は、いつもと同じように唐突に、淡々と、静々と肅々と、オレたちの名を呼んだ。

やっぱりだ。災厄はアレで終わりなんかじゃなかった。

それどころか、コレが始まりだ。

「以上3名に対する現状説明許可申請と特別協力者申請が受理されました」

もう逃げられない。

「本人の許可を求めます」

自分で望んだことなのに。

オレはこの世界に触れたいと。

「いいよ」

「いいですう」

どうしてこんなにも恐怖に喉が震えるのだろうか？

「……いいぜ、白根」

虚偽ウソかもしれない。

真実ホントウかもしれない。

もしかすると、そんなコタエは存在しないのかもしれない。

それでも、オレは。

「ちょうどお前が何者か知りたかったところだ」

「ありがとうございます」

白根は何とも珍しい事に微笑んだ——オレが覚えている限りで、

2回目の事だ。

レアなモノを見てしまった、と思うと同時に、その非日常性に背

筋がざわつく。

「では、本日より1週間後の日曜午前10時、桜崎駅南口前にてお待ちしています」

ざわざわと、何かが近づいてくる予感がする。

オレは思わず自らの両肩を抱いていた。

誰か震えを止めてくれ——

オレたちに向かって用件だけ告げた白根は、さっと部室を立ち去って行った。

鼓動が速い。まるで何かにせかされているかのようだ。目まぐる

しく変化していこうとする時間に乗遅れまいと。

「これで逃げ場はない、か」

ぽつりと呟いたオレは、自嘲気味に笑う。

自分で望んだ事だろう？

大坂井に詰め寄られて戸惑ったのも、望月の言葉で苛立ったのも、オレ自身が非日常の中に在りたいと願ったからだ。日常から切り離された何かを求めていたからだ。

何しろ非日常から手を切るのは簡単だ。

夙夜との交流を断てばいい。

コイツがオレの災厄のすべてだから、切り離してしまえばもう2度とオレは災厄なんかに関き込まれなかった筈だ。

でも、オレはそうしなかった。

そんな日常が嫌いじゃないと思ってしまっていたから。

何より、コイツのことも白根の事も、もちろん先輩の事も嫌いじゃなかったから。

「オレもつくづくバカ野郎だな……」

さっさと逃げていればよかったのに。

「ふふふ、でも、シユクヤくんもマモルちゃんも、京都でずいぶん成長したみたいなのです」

成長って……ケモノのことか？

「マモルちゃんが少しずつ魔法を使っているのです。だから、ワタシはとっても嬉しいのです」

傍から聞けば、ゲーム世界とでも混同しているのかと問われそう。なこの台詞、オレには身に覚えがあった。

言葉は魔法。

それは、この目の前の可愛らしい半端敬語の先輩が繰り返す言葉だ。

「ワタシは――」

先輩は、にこりと笑った。

「マモルちゃんに、素敵な魔法使いになってほしいのです」

まるで京都で起きた出来事を、一言一句漏らさずに伝聞したかのように。

オレは夙夜の事を知らない——内にケモノを飼うこの同級生が、どんな過去を持っているか。

白根の事を知らない——もしかするとその謎はもうすぐ彼女自身の口から語られるかもしれないが。

もちろん、この先輩の事だって——オレたちに名を与え、優しい笑顔でいつも最後には受け入れてくれる先輩の事。

きつと、皆がそれぞれ何かを抱えているのだ。

誰にも理解してもらえない、心の痛みと闘いながら。

18 .. 伝道師の終わらない災厄

と、オレの計画ではこのままエピソード、白根の告白が待っている日曜日まで大人しく過ごす予定だった。

張本人の白根と言えば、ここ3日ほど学校を休んでいる。一応、転校してきたばかりなんだから授業はまじめに出た方がいいんじゃないかと思いつつも、組織の方で何かあったのだらうと推察もある。

しかし、白根の性格からして日曜の約束が破られる事はないだろう。

オレは束の間の休息を味わう予定だった、が、無駄な不幸体質はほんの1週間さえも穏やかに過ごさせてはくれないようだった。

それはとある平日の放課後、部室ではなく先輩のバイト先である花屋『アルカンシエル』で夙夜と共にコーヒーをいただいている時の事だった。

苦いコーヒーが嫌いな夙夜は、たっぷりの砂糖と、茶色より白に近い色になるほど大量のミルクを投入したナゾの液体を作り出し、ご満悦だった。

が、どこことなく、なんとなく落ち着かない様子に見えるのはオレの気のせいかな？

「どうした、夙夜。何かあったか？」

「んー、何かあったかって言うか、これから何か起きるっていうかなんだその予言者のような台詞は。」

「誰か来るのか？」

「うん。あの、マモルさんがあんまり好きじゃない人」
あんまり好きじゃない人。

そう夙夜が認識しているのはただ一人だけだ。
カランカラン、と店の扉が開く音がする。

「いらつしやいませ、ですう」

先輩はにこにこと笑ってその客を迎え入れた。

花屋という場所が似合わない長身痩躯の男。細く束ねた黒髪と小さなレンズの眼鏡。そして、東京という場所で聞くには馴染まない関西弁のイントネーション。

前回見た時は白衣だったが、今回はよれよれとしてはいるものの、一応のスーツ姿だった。

「久しぶりやなあ、マモルちゃん。久しぶり言うても、1週間もたっていないんやけどな」

「望月っ……！」

出来れば2度と見たくなかった、胡散臭い笑みを浮かべて。

先輩は、数ある花瓶からすっと一本の花を抜き、望月に向かって差し出した。

「はじめましてなのです——『災厄の伝道師』^{エヴァンゲリスト}さん」

「おーきに。可愛らしい嬢ちゃんやなあ。にしても、『災厄の伝道師』^{エヴァンゲリスト}っちゅうんは非道い^{ヒド}んちゃう？」

「ワタシは正直なのです。思ったことしか言わないのです」

先輩にしては珍しい、つんとした態度だった。

肩を竦めた望月は、先ほど先輩に渡された花をくるとまわした——いや、あれは花じゃなくただの葉っぱ？

「ほんで、コレは？ 何の植物や？」

「月桂樹だよ」

夙夜が即答した。

「古代ギリシャでは勝負に勝った人の頭に月桂樹で作った冠を乗せたことから、『栄光』の花言葉を持つ常緑樹だよ。香りがいいから、香辛料として使われる事も多いね」

あ、久々に聞いた、コイツの植物知識。

「コレが月桂樹やったんか。初めて見たわ」

顔の前でくるとはっぱを回しながら首を傾げた望月は、再びにこりと微笑んだ。

「あ、自己紹介が遅^{オソ}うなりました。ボク、望月桂樹^{もちづきけいぎ}、言います。この名前、親が月桂樹を意識してつけたらしゅうてなあ、いっぺん、月桂樹っちゅうのがどういふもんか見てみたかったんや。おおきに」
そして、スーツの胸ポケットにその葉をさした。

「いったい、この男はここまで何をしに来たんだ……？」

「望月」

「なんや、マモルちゃん」

「オマエ、京都からこんな東京の片田舎まで、何しにきやがったんだ？ もちろん、オレに会いに来たとか言ったらぶん殴るからな」

一応、予防線をひきつつ、オレは望月に尋ねた。

「そんな警戒せんといてえや。ホンマにマモルちゃんに会いに来たゆうんに」

ふざけんな。

席を立ちあがりかけたオレに、望月は慌てたように付け加える。

「組織の任務や、任務。ゆうても、ボクの方から志願したんやけど」
組織の任務って、まさか……

「マモルちゃんの監視や」

ぞわり、と背筋を冷たいものが這う。

コイツがオレの監視？ 得体の知れないこの男が？

ふざけんな。

夙夜、今ならリミッター解除でコイツを力の限り殴りとばしてくれて構わないぞ。

「まあ、仕事は来週からやけどな。日曜日に葵から説明があるはずや」

「……」

全部知れている、というわけか。

「この店の事は葵から聞いてな、今日は挨拶に来たんや。マモルちゃんとケモノくんと、そこの、可愛らしい嬢ちゃんにな」

最悪だ——災厄だ。

何が最悪って、次の日学校に行ったら、オレたちのクラスの担任が病気の手術のため入院で、その代理として非常勤講師がはいったんだが、それが予告通りに望月という胡散臭い研究者だったって事がだ。

担当教科理科、とくに生物。

来週の月曜から本格的に授業を受け持つそうだ。

6月も半ば、そろそろ梅雨明け宣言が出るであろう時期の事だった。

一 新たな始まりのエピローグ

約束の日曜日、オレは指定された桜崎駅南口から遠ざかるように、学校へと足を向けていた。

駅前の道でシリウスの事件の時の若い刑事を思い出し、駅からのびる坂を登るときに『才女』萩原加奈子が殺された日の事を思い、目の前に立ちはだかる神楽山を見上げて梨鈴の事を思い出した。

たった1年。

その間に、オレの身には幾つもの珪素生命体^{シリカ}の痕跡が刻まれてしまった。

夙夜の言う事が本当ならば、それは、他の珪素生命体^{シリカ}にとって磁石のようなものだという。オレと夙夜と白根という磁石が固まっている限り、永久に珪素生命体^{シリカ}を引き寄せ続けてしまう——災厄は終わらない。

学校の敷地に入り、部活動の練習をしている運動部の横を通り抜けて文学部の部室へ。

戸を開けると、見慣れた部屋がオレを出迎えた。

2年前に入学して、運動する予定もなかったからなんとなく文学部に入部して、夙夜に会って先輩に会って、梨鈴と出会って。シリウスがいて、白根が来て……とうとう、望月までやってきやがった。長いな、2年って。

高校生らしからぬ結論をだして、オレは携帯端末で時刻を確認する。

白根との約束は10時。

そろそろ行くか。

ぱたんと扉を閉じたオレの背後では、数日間この部室に放置していたワレモコウから紅の色が消え、茶色くかさかさに乾いた花が幾らか散っていた。

変化が来る。

オレの望んだ、望んでいない、世界の変化が来る。

逃げたい。

逃げたくない。

逃げられない。

逃げちゃ駄目だ……絶対に。

——オレが世界を選んだのだから

世界の狭間から抜け出したが故、自らの操り糸に絡め取られた道化師は、もはや何処へも逃れ得ぬ。

両手足でもがけばもがくほど、考えを廻らせれば廻らせるほど、さらに奈落へと堕ちて逝く。

ワレモコウの窓向こうに広がる空はどんよりと曇って、梅雨の到来を告げていた。

一 二 .. 新たなる始まりのエピローグ（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

シリーズはまだ続きますので、よろしければ続きもご覧ください（
8／9 現在未掲載）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8491g/>

無関心の災厄 ー ワレモコウ

2010年10月8日11時15分発行